The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	北村季吟の源氏学（三）：附・日本大学図書館蔵『源氏物語微意 下』翻刻
Author(s)	宮川, 真弥
Citation	詞林. 2016, 60, p. 19-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58623
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

北村季吟の源氏学（三）

――附・日本大学図書館蔵『源氏物語微意　下』翻刻――

宮川　真弥

はじめに

前々稿[1]より数稿にわたり、『源氏物語』に関する季吟の著述等について概観し、そのうちのいくらかの翻刻を供し、以て季吟の源氏学の再検討を企図しているところである。

前々稿では、日本大学図書館蔵[2]『古今集并歌書品々御伝受之書』および『源氏物語微意』（以下、『微意』と称する）の基礎的研究を行った。

また、前稿[3]では、『十如是和歌集』『源氏物語忍草』の新出伝本を報告し、『微意』の記述によって『湖月抄』における年立に関する「一説」が季吟説であることの証明を行い、『源語秘訣』の季吟奥書によって推定される季吟周辺の交流圏についての論述を行った。

本稿では、前稿までの補足を行うとともに、季吟周辺の『源氏物語』関連書について論じることとする。

一　「読覆醤集遊石山寺詩」について

まず、『微意』下巻「源氏物語止観説」の後に記される「読覆醤集遊石山寺詩」について言及したい。題の通り、石川丈山『覆醤集』の「遊石山寺[4]」詩に対しての詩である。韻は上平声六魚韻（廬・魚・書）。以下に本文を掲出し、私に読み下しを附した。

読覆醤集遊石山寺詩

半日幽閑入学廬　窓前数帙払衣魚
紫藤言葉国朝宝　那箇人称浮艶書

半日幽閑として　学廬に入り
窓前　数帙　衣魚を払ふ
紫藤の言葉　国朝の宝
那箇の人か　浮艶の書と称せん

また、季吟は『疏儀荘記[5]』に以下のように記している。後述する季吟手沢『源氏物語』本文に関わる記述も見られるた

め、やや長文を引用する。

〈稿者注：宝永二年（一七〇五）五月の〉六とせ七年のいにさきの師走、法印に叙して再昌院となのる、林大学頭、そのゆへの記をかき、詩作りて給へりしを、額のやうにて軒にかけて、即家の名とせり、院内に書棚をまうけて、たなのうへには古今集、桑原三位〈菅長義卿〉筆、二条家貞応本をかけるに、門人三井氏、東野州の自筆の本を所持せしをかりて、再三校合取捨せり、源氏物語は東光院殿〈種通公述作孟津抄貞徳源氏承此説〉桐壺の巻を書給ひ、安藝の国一の宮感神院に奉納し給ひしよし奥書有て、三藐院〈信基公外題同〉・西三条実枝公・飛鳥井雅敦・雅庸など助筆し給ひし本、いともかしこき御めぐみのたまものぞかし、箱のたくみ、蒔絵のさまなど、まことのおほやけの物と見えて、凡ならず俗をはなれたり、折ふし五月雨晴て、文どもの虫ばらひなどする中に、覆醤集石山寺にあそべる口号をみて、

半日幽閑入学廬、窓前数帙払衣魚、
紫藤言葉国朝宝、那箇人称浮艶書、

一条禅閤の花鳥餘情のぞにも、我国の至宝は源氏物語に過たるはなかるべしと称美し給へるさうしをや、伊勢物語・百人一首・詠歌大概は飛鳥井一位より其抄をうつしとれり、これなん後水尾院御説の聞書也、万葉集・八代集より新勅撰・続後撰まで自筆に抄出せり、是等をもちて、家をたて、一流を立て、わが子孫の此路にこゝろざゝんもの、学びならひなば、いかで兎の裘のはかなき名を残すものあらん、其外、文選・文集、菅家の御点なり、これもやまとうたのたよりとせんに、かたはらさけずしたがひもちて、今はこれらの文をねられぬ夜半の我友ならし、

加えて、架蔵の掛物[6]には、以下のようにある。

読覆醤集遊石山寺詩
半日幽閑入学廬窓前数
帙払衣魚紫藤言葉国
朝宝那箇是称浮艶
書

花鳥のあまりある情は更
なり五てうの三品も源氏
みざらん歌よみは無下の
事とかやの給ひし
むらさきの一もとゆへに言の葉の
千くさのいろもそふるとぞきく
法眼季吟（朱丸印・七松）

架蔵の掛物のみ第四句に異同があり、「那箇是称」となっているが、詩意は変わらない。

当該詩の詠作時期については、前々稿に述べた「源氏物語日本紀准拠」「源氏物語止観説」「てにをは少々」の追加が、『微意』の奥書によって、『微意』成立に遅れる元禄八年（一六九五）六月六日と推定されることを踏まえると、当該詩をその頃の作と見ることも不可能ではない。しかし、『微意』において当該詩がやや小書きにされていることや、『微意』所載詩の異同が『疏儀荘記』所載詩と一致することを考慮すると、後の書き入れが、元禄十五年（一七〇二）十月の柳沢吉保への伝授の際に一体化したものである可能性も排せない。架蔵の掛物に「法眼」とあることから、ひとまずは当該詩成立の下限を、季吟が法印に叙された元禄十二年（一六九九）十二月十八日以前とするにとどめておきたい。なお、『疏儀荘記』の記述については、法印に叙されて後の詠であるため、初詠ではないと考えられる。

当該詩が石川丈山「遊石山寺」詩に応えるものであることは詩題からも明らかであるが、詩意を窺うにとりわけ「遊石山寺」詩の第八句「琅函にも亦た艶書を入るるや不や」に反応したものであることが推察される。これは、例えば『微意』注記37に、

或人問云、人のいましめとするとならばいかでか聖賢のふるまひ節婦の貞操をかきてこそあらめ。あやなき妖艶不義のわざをかきて好色のなかたちとなす事、如何。答云、聖賢の詞、貞女のわざは旧記に既に書顕して誰も見聞侍りぬ。今此草子には態好色のかたうとく成て、うへにはそのたよりなるやうにて、下にいましめをふくめてをのづから善にみちびくならし。春秋史記などにもさまざまの不義のわざどもを書伝て勧善懲悪せられし。是亦好色の媒といはば可ならや。たとへば此物語のさまは巽与の言のよく人をよろこばしめて微意をふくめしたぐひとしるべし。

とするごとき、『源氏物語』が「浮艶書」ならぬとの言明と軌を一にする。それを一言に述べうるからこそ、当該詩を伝授書である『微意』に記し添えたのだと考えたい。

二　『微意』の注記の錯簡について

本稿をもって、『微意』の翻刻が出揃うこととなる。それに伴い、本資料の活用に便なるべく、本稿末尾に「『微意』『湖月抄』『集成』『増註』『大成』対照表」を附した。これは、『微意』と『湖月抄』（板本・影印本・活字本）との比較のために各資料での所在を示し、他の注釈書との比較のために『源氏物語大成』における所在を示したものである。

さて、『微意』に『湖月抄』を参照する記述がしばしば見え、[7]『湖月抄』を併用する意図があったと思しいことは既に述べた。また、前々稿にも示した「北村季吟書簡：北村正立

宛[8]」には、講談の際には必ず読み聞かせるだけで、写させないようにとの指示があった。しかし、それらのことを踏まえると、『微意』にはいささか不審な現象が見られるのである。

『微意』の注452と注453は、本来の順序とは逆になっており、序列を正すために前後の入れ替えを示す符号が記されている。このように、本来、『源氏物語』全文を有する『湖月抄』などを用いて読み進めた場合、注記の順序の転倒にはすぐに気がつくはずである。何故なら、転倒していた場合、当該本文はそれ以前の箇所に存在するために、いくら読み進めても当該本文を見出せないからである。しかし、対照表にも示したように、注66・67、注92・93、注211・212では、順序が転倒しているにもかかわらず、訂正されておらず、かつまた入れ替えを示す符号もない。

これは『微意』の閲読や講釈の際に、『湖月抄』の参照が逐条では行われていなかったことを示唆する。訂正が行われた注452・453はやや前に「師説湖月抄にくはし」（注450）と『湖月抄』を参照させる注記が存在するが、訂正が施されていない三例はその例にあたらないことも傍証となろう。

『微意』閲読の際、『湖月抄』を傍には置き、参照が求められる箇所で開きはしても、『微意』の見出し語と対照しながら『源氏物語』を読むことはなく、講釈の際もまた同様であった[9]と考えられる。伝授書の性格上、見出し語から場面が想起できる程度の理解度は求められていたのであろう。

三　『源氏物語』伝授に関する資料

季吟の関与する『源氏物語』の伝授に関する資料としては、『微意』の他には『源語秘訣』と切紙とが挙げられる。『源語秘訣』については、前稿で取り上げた[10]ため、省略に従う。

現存の切紙として、二通の「源氏物語三箇之大事」の切紙が柳沢文庫蔵『古今集并歌書品々御伝受御書付[11]』に納められている。これらは『微意』が納められる『古今集并歌書品々御伝受之書』と一具とみられる。

このうち、「一二、源氏物語三箇之大事」の裏書には、三箇大事の「三つが一つ」について、『源語秘訣』では『春秋左氏伝』を引いているが、家伝ではその義を用いないと記してあり、『源語秘訣』を付与された者を対象としていることが明らかである。一方、当該切紙と『微意』とは一具のものとして扱われていると思しいが、その授与時期の先後は詳らかでない。

なお、当該資料の他の切紙としては、彦根城博物館蔵『源氏物語秘訣[12]』があり、三箇大事の外として、桐壺更衣の名が「おたま」であるとの説が記され、証歌として「たづねゆくまぼろしもがなつてにてもたまのありかをそことしるべく」（桐壺帝、桐壺巻。傍点は稿者による）が挙げられている。

さて、『源語秘訣』や切紙が用意され、『微意』のような伝授書が作られる一方で、季吟の周辺では『湖月抄』を理解す

る助けとなるべき書も作られていた。それが天理図書館蔵『源氏物語打聞』[13]（以下、『打聞』と称する）である。

『打聞』は、従来、箕形如庵の説を聞書した季吟自筆草稿であり、『湖月抄』に先行するものとされてきた。しかし、実際には季吟の孫の季任の書写にかかり、季吟の影響下で『湖月抄』に施注したものと推定される。その検討の詳細は旧稿[14]に記したため割愛するが、『湖月抄』が『源氏物語』の注釈書であったように、『打聞』は『湖月抄』の注釈書なのであった。

季吟にとって公刊しうる範囲での達成であった『湖月抄』が、季吟の在世中、既に施注対象となっていたことは、季吟らによる講釈の場において、『湖月抄』がテキストとして、いわば教科書のように用いられていたことを示していよう。はじめからその意図をもって作成されたか否かはさておき、流布本となり、近世期に『源氏物語』理解の基礎となった現象が、既に季吟周辺で現れていたことは非常に興味深い。

以上のことを総合すると、季吟の門弟が『源氏物語』を学ぶにあたっては、『打聞』を用いて板本『湖月抄』を理解し、板本『湖月抄』で理解を深めた後に『源語秘訣』を授与され、さらに進んで切紙や伝授書『微意』で深奥を知るという学習過程が組まれていたと推定されるのである。

四　『源氏物語』の本文

季吟と関わりのある『源氏物語』本文についても言及しておきたい。

先掲の『疏儀荘記』の記述によれば、九条稙通が桐壺巻を書写し、厳島神社（「安藝の国一の宮」）の感神院に奉納したとの奥書を有し、近衛信尹・三条西実枝・飛鳥井雅敦・飛鳥井雅庸などが分担筆写した『源氏物語』を晩年の季吟は所有していたという。しかし、稿者は当該資料を確認できていない。博雅の御示教を請う。

ただ、同じく季吟晩年の自筆本『源氏物語』が細川家北岡文庫に蔵されていることは確認している[15]。以下、解説目録から引用する。

5．源氏物語　列帖装写本五四帖　赤二〇四・三七

北村季吟（一六二四～一七〇五）筆。季吟は源氏物語の注釈書『湖月抄』を著す。当本は、元禄七年（一六九四）、七一歳の折りに書写したもの。奥書に、江上向南亭[16]における書写と記される。季吟と実子湖春は、元禄二年（一六八九）に幕府に召し抱えられ、翌三年、神田鷹匠町（小川町）に邸を賜り、近水亭、向南亭と称した。従って、その向南亭で書写したものであろう。公家様を意識したのか枡形に仕立てられる。なお、最終「夢浮橋」の帖は、一行毎に、金、銀、朱（二種）、藍、墨、緑の七色を使

い分けて交ぜ書きされる。[17]

なお、奥書に「北村／氏」の方印が捺されている。

北岡文庫本の本文は『湖月抄』の本文に極めて近い。『湖月抄』の本文については、清水婦久子氏が、

『湖月抄』の本文校訂は、（稿者注：『絵入源氏物語』の）慶安本を底本とし、『万水一露』や『首書源氏物語』と各種注釈書を参照しつつ行われたと考えられる。青表紙本系統あるいは河内本系統の由緒正しい写本や別の版本を底本にしたと考えるべき理由は見当たらない。[18]

と明らかにされた。『湖月抄』が「慶安本と異なる数少ない例」[19]として、清水氏が掲出された末摘花巻の例のそれぞれにおいて、北岡文庫本は『湖月抄』と一致する。また、『絵入源氏物語』慶安本や『湖月抄』の独自異文と見られる箇所においても、同様である。一例を挙げると、葵巻の「あやしき山かつさへみたてまつらんとすなれ。とをきくにくにより」（『源氏物語大成』[20]二八六頁三・四行目）の傍線部は「すれは」となっており、北岡文庫本は『湖月抄』と同様の形をとる。更に、本文に傍記される異本注記も『湖月抄』に一致する。なお、漢字の宛て方や仮名遣いには異なる点がある。詳細な検討は別稿に譲るが、北岡文庫本は『湖月抄』を写したか、季吟の手元にある『湖月抄』との共通祖本を元に作成されたと見て良いだろう。[21]すなわち、季吟は『湖月抄』の本文を、晩年まで自家の証本と見ていたということになろう。注釈においては、板本と伝授書等で公開の範囲を峻別する一方、本文については良質な本文を板本として提供する意思があったと考えられる。

このことは季吟の板本観を考える上で示唆に富む事例である。関連して、『湖月抄』での引用文献について述べたい。

『湖月抄』に「細」との肩付で引用される注記は、実際には『明星抄』からの引用であることを三浦尚子氏が明らかにしている。[22]ここでさらに、その引用が板本『明星抄』によるものであることを指摘する。

以下は、『湖月抄』総角巻、「ひろばかり」の頭注である。

ひろはかり　〈細〉催馬楽のかよりあひけりの心にて書り。中君あやしくおもひ給ふへきと也。〈朱〉一尋（ヒトヒロ）の心也。〈孟〉尋斗（ヒロハカリ）とはけぢかくてといふ心なるへし。催馬楽にて書之云云。[23]　（18丁表）

傍線部「朱」の肩付は、板本『明星抄』を用いていることの証左である。板本『明星抄』を引用しよう。

ひろはかり　催馬楽のかよりあひけりの心にて書り。中君あやしく思給へきと也。〈朱〉一尋の心也。　ひろばかり　尋計（ヒロバカリ）[24]　（総角巻、8丁表）

板本『明星抄』には、底本で朱書きであったことを示すと考えられる「朱」の肩付がしばしば見られる。『湖月抄』の該当箇所では、板本『明星抄』の「朱」の肩付をそのまま引用しているのである。この「朱」の肩付は『湖月抄』におい

て、この箇所ともう一箇所[25]に見えるのみであり、不要な肩付を消し損じた名残と考えられる。

『湖月抄』「凡例」で、季吟の源氏学の師・箕形如庵について、

此如庵老人はもと称名院殿、三光院殿より相つたへて、八条の宮の御前にても講ぜち申され侍しとかや。其故に此講尺には細流を以てもとゝせられ侍し。

と述べる通り[26]、『細流抄』は季吟の源氏学においても根本的な資料である。

また、『湖月抄』において、『細流抄』を示す「細」の肩付の他に、『明星抄』を示す「明」の肩付が複数存在し、かつ「細」「明」の肩付が併記される例もあることからは、『明星抄』と区別して『細流抄』の説を引用しうる資料を季吟が所持していたことが推定される。そのような状況にもかかわらず、季吟が実際に使用したのは板本『明星抄』なのであった。

先述の通り、『湖月抄』の主底本は板本『絵入源氏物語』慶安本であった。『春曙抄』の主底本は、鈴木知太郎氏が指摘するように[27]、『磐斎抄』との共同原拠本が想定されるが、その共同原拠本は慶安板本を主底本としている。板本『明星抄』の利用を踏まえるに、これらの事象は、板本が書き入れに便利であるということを超えて、板行された古典本文に対する季吟の信頼を表しているものと考えられる。『湖月抄』においても、信頼しうる古典本文を提供しようとする季吟の意図を読み取ることができよう。そのことは北岡文庫本『源氏物語』や『打聞』の存在が示唆するところである。

終わりに

本稿では、季吟「読覆醤集遊石山寺詩」についての考察、『微意』の注記の錯簡の分析、季吟周辺での『源氏物語』伝授資料および季吟手沢『源氏物語』本文の報告、季吟の板本観の検討を行った。

本稿までの三稿で、『微意』を中心に、季吟周辺の『源氏物語』関連書について、様々な観点から報告した。

管見に入った季吟周辺の『源氏物語』関連資料については、注を含めて総て触れたが、なお遺漏の多きを懼れる。博雅の御教示を請うとともに、今後とも資料の博捜に努めたい。

注

（1）拙稿「北村季吟の源氏学（一）――附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意　上』翻刻――」（『詞林』第57号、平27・4、http://doi.org/10.18910/54508）。以下、本稿における「前々稿」は同稿を指す。

なお、前々稿に以下の誤りがあった。お詫びして訂正する。66頁上段16行目、誤：国中間道、正：閨中間道。

また、51頁上段12行目で、「黒田直邦は古今伝授を受けた後の元禄十五年の「和歌の会」で初めて参会しており、これもまた古今伝授と無縁ではあるまい」と記したが、元禄十四年九月十三日

の歌会にも出座しており、正しくはこれが初めての参会となる。ただし、黒田直邦が元禄十四年九月五日に古今伝授を受けたことと、直邦が柳沢吉保の歌会へ参会することとの関わりを述べる論旨に変わりはない。

（2）平成二十八年の日本大学における改組によって、日本大学総合学術情報センター蔵から日本大学図書館蔵へと所在の名称が変更された。

（3）拙稿「北村季吟の源氏学（二）――附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意　中』翻刻――」（『詞林』第58号、平27・10、http://doi.org/10.18910/54448）。以下、本稿における「前稿」は同稿を指す。

なお、前稿に以下の誤りがあった。お詫びして訂正する。60頁上段19行目、誤：国中、正：閨中。65頁下段8行目、誤：国中、正：閨中。66頁下段2行目、正しくは一字下げ。

（4）参考に石川丈山「遊石山寺」詩を掲出する。私に読み下しを附した。韻は下平声十一尤韻（舟・秋・流・幽・不）。

遊石山寺　　石山寺に遊ぶ

僧房門外繫扁舟　　僧房門外に扁舟を繫ぐ
高蹈翠嵐黄葉秋　　高く蹈む翠嵐　黄葉の秋
一片山雲将雨去　　一片の山雲　雨を将ゐ去り
千尋湖水鑿崖流　　千尋の湖水　崖を鑿つて流る
飛楼畳磴真仙館　　飛楼畳磴　真の仙館
奇石怪岩皆鬼幽　　奇石怪岩　皆な鬼幽たり
紫氏揮毫記源氏　　紫氏　毫を揮ひて源氏を記す
琅函亦入艶書不　　琅函にも亦た艶書を入るるや不や

引用は富士川英郎・松下忠・佐野正巳編『詩集日本漢詩　第一巻』（汲古書院、昭62・2。9頁）による。同書の底本は内閣文庫蔵寛文十一年刊本、請求記号：205-0122。

（5）引用は大田南畝『続三十輻』（『三十輻　第二』（図書刊行会、大6・5））による。同書の底本は国立国会図書館蔵『三十輻』（請求記号：辰―四四。http://doi.org/10.11501/2554010『続三十輻』巻九（通巻二四巻）。）。但し、津村正恭『片玉集』（宮内庁書陵部蔵。函架番号：四五八・一。実物は未見、国文学研究資料館のマイクロフィルム（マイクロ請求記号：20-56-1-273）による）により、一部改めた。

（6）架蔵、野洲市歴史民俗博物館に寄託。整理番号：向一。紙本。本紙、縦三一・〇糎×横五三・二糎。表装、縦一一七・九糎×横五五・〇糎。軸、横五九・四糎。

（7）注記215・225・230・444・450・462・464・465が『湖月抄』の注記の参照を求めるものである。また、注記181・182・197が年立に関して、注記492は夢浮橋の巻名について、それぞれ『湖月抄』を参照させるものである。注記243では『湖月抄』の説に言及している。注記457は引用元を明示しての『湖月抄』からの部分引用である。なお、注記120では『湖月抄』の注記が引用され、「在湖月抄」と記されるが、全文を引いているため、『湖月抄』を参照する必要がない。

（8）早稲田大学図書館蔵。請求記号：チ0603890 0029 0002。

（9）吉保へ『微意』を伝授するまでに、誰に対しても『微意』の講釈が実施されていなかった可能性もある。その場合は、講釈の場の様相は想定しえない。

（10）また、拙稿「伝北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾」（『語文』（大阪大学）第104輯、平27・6）でも詳述した。

（11）所蔵番号：〇一―一四。原本閲覧停止中のため、実物は未見。

宮川葉子『柳澤家の古典学（下）――文芸の諸相と環境――』（青簡舎、平24・2）に翻刻・解題が備わる。以下、切紙の呼称は宮川氏に従う。また、国文学研究資料館がマイクロフィルム（マイクロ請求記号：350-1-8-E）を所蔵している。

(12) 掛物。実物は未見、野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）編『野洲市誕生記念企画展図録　北村季吟――没後三〇〇年記念展――』（平17・4。19頁）の影印による。

(13) 天理大学附属天理図書館蔵。整理番号：913.36/イ45。

(14) 拙稿「天理図書館蔵『源氏物語打聞』の再検討――北村季吟とその後裔の古典学をめぐって――」（『近世文藝』、第104号、平28・7）。

(15) 公益財団法人永青文庫蔵熊本大学附属図書館寄託。登録番号：赤二〇四・三七。実物は未見、国文学研究資料館のマイクロフィルム（マイクロ請求記号：224-39-1）による。

(16) なお、「向南」の号は『万葉集』161番歌の初句「向南山」を「きたやまに（の）」とすることに因み、「北」を意味するものであろう。

(17) 森正人・徳岡涼編著『第25回熊本大学附属図書館貴重資料展　解説目録　源氏物語千年の時』（熊本大学附属図書館、平20・10、http://hdl.handle.net/2298/25744）。夢浮橋巻の一葉が掲載される。

(18) 清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書院、平15・3）、255頁。なお、清水氏は同書で『湖月抄』において、「頭注や傍注の「抄」は『岷江入楚』の注とほとんど異なる所はない」（257頁）と指摘している。

(19) 注（18）掲出書、251頁。

(20) 池田亀鑑『源氏物語大成　校異篇』（中央公論社、昭28・6～29・2）。なお、『源氏物語』の校異については同書の他、加藤洋介『河内本源氏物語校異集成』（風間書院、平13・2）、および加藤氏のウェブページに掲載される「源氏物語校異集成（稿）」を用いて確認した。

(21) なお、野村貴次氏が『北村季吟古注釈集成解説　季吟本への道のり』（新典社、昭58・3、北村季吟古註釈集成別1。608頁）で指摘された、葵巻において、早印本での本文の脱落を、後印本で埋木修正している箇所は、北岡文庫本では後印本と同文となっている。

(22) 三浦尚子「『源氏物語湖月抄』所引「細流抄」に関する一考察」（『語文研究』（九州大学）、92号、平13・12）。

(23) 『湖月抄』の引用に際しては、『源氏物語湖月抄』（新典社、昭52・7～53・7、北村季吟古註釈集成7～17）を用いた。同書の底本は早印本ではあるが、一部に野村氏の操作が加わるため、他の伝本も適宜参照し、異同のないことを確認している。以下、同様である。

(24) 『明星抄』の引用は、中野幸一編『源氏物語資料影印集成8　明星抄十六―二十』（早稲田大学出版部、平2・7）による。同書の底本は早稲田大学図書館蔵『明星抄』（請求記号：文庫30A0092、無刊記）。

(25) 若紫巻5丁表、「かのくにのさきのかみ」の傍注「〈明〉播磨の前の守也〈朱〉明石の入道の事也」である。なお、夕顔巻6丁表、「しそくさして」の頭注には「紙燭也紙束とも云〈明星〉さきにこの扇はやがて御覧ずへきを、さあれば、此乳母を問給ふ事の態ならぬやうなれば先さし置て此とふらひよくし給ひて、帰給

とて見給心つかひ殊勝也〈明〉物語なとし給うちに日もくれにければなり」とある。「明」の肩付以前は『細流抄』も有する一方、「明」の肩付以降は板本『明星抄』で「朱」と示される箇所であり、注記生成や肩付の付与・修正の過程が窺えて興味深い。

(26) なお、季吟は『湖月抄』「発端」の「此物語諸抄」において、『細流抄』を三条西公条（称名院）、『明星抄』を三条西実澄（三光院）の作と記している。また、『明星抄』については、「〈師説〉細流に発端一冊を加へて所々に小補（セウホ）あり」と記す。

(27) 鈴木知太郎「枕草子諸版本の本文の成立――特に慶安版本、盤齋抄、春曙抄、旁註本について――」（『文学』3巻2号、昭10・2）。

※引用に際して、割書・小書・肩付は〈〉で、改行は／で示した。字体は通行のものに改め、濁点や句読点を適宜附した。『源氏物語微意』の注記は翻刻の通し番号で所在を示した。

日本大学図書館蔵『源氏物語微意　下』翻刻

【凡例】

一、底本には日本大学図書館蔵、北村季吟『源氏物語微意　下』（請求記号：911.104/Ki.68/19）を用いた。

一、底本の翻刻に際しては、可能な限り原文のままとすることを原則とし、改行・清濁・誤字・脱字などに操作を加えることはしていない。ただし、字体は適宜通行のものに改め、合字は開き「□」で示し、意の通じない箇所や誤解を与えかねない箇所等には「（ママ）」と傍記した。表示できない漢字については、「※［X＋Y］」と記し、構成要素を示した。

一、丁移りの際には、行末に「」X丁オ（もしくはウ）」と、丁数と丁の表裏を示した。

一、『源氏物語』の巻名が記される箇所には、行頭に丸括弧囲み数字で巻次を示した。巻名が注記同様、一字下げで記されており、注記に紛れ易いための処置である。なお、若菜巻は上下に分かたれ、雲隠巻も注記を有するため、巻次は55までとなる。また、注記ごとに通し番号を付し、行頭に示した。これらの番号は上・中・下巻を通して用いる。

一、その他、備考を「()」で示した。

【翻刻】

（遊紙1丁）

(37)横笛巻

335やまの帝は二宮もかく人わらはれな
るやうにて詠給ふなり入道の宮
も此よの人めかしきかたはかけはなれ
朱雀院かくさま〳〵の御歎き
あるは悪后の光君のためさかな
くおはしけるむくひを書にや
梅壺の久しき御心さしのむな
しかりしなとも其心なるへし
336あまたつとへ給へる中にも此宮
こそはかたほなる思ひましらす
万事十分にとゝなふ事はなき
世の習ひを思ひあはすへし易の亢
龍の悔ある理り誠なるにや
337さうのことをいとほのかにかきならし
給へるもおくふかき声なかにいと
と心とまりはてゝ
夕霧もとより懸想の心有しに
此箏の音にいとゝ心とまり給ふ也

」1丁オ

」1丁ウ

すへて女はわか夫ならぬ外の男に
対して情しりかほつくり風流の
わさなともていつましき物なるへし
此女二宮柏木の丶ちに二夫に見
えしの心つよくましまさは夕霧
にかくみやひかはし給はてこそ
あるへけれ尤人の教を書る物也

338 た丶末つかたをいさ丶か引給ふ
想夫憐にはことにさしいらへ
あるましきわさなるを此次に
光君のやかて夕霧にも御異見
ありしは此宮にた丶ならしと
思ひやり給へる故也恥かしきさま也

」2丁オ

339 かの今はのとちめに一念のうらめしき
にももしは哀とも思ふにまつはれ
てこそは長きよのやみにまとふわさなれ（ママ）
臨終の一念に生所定るといへ
りと細流にも註せり又人の教也

340 三宮こそいとさかなくおはすれ常
にこのかみにきをひ申給ふといさめ聞え
三宮は後に匂兵部卿と申て帝
后とりわきおほしめしたるみこ也
をしたちあやにくなる本性に

」2丁ウ

て人の煩ひなるへき事をもかへり
み給はす手習の君に対してわり
なき有さま薫にうしろめたき
しわさとも有ける其御心はへ
をかねてみせたる物なるへし

341 女は猶人の心うつるはかりのゆへよし
をもおほろけにてはもらすましう
こそ有けれとおもひしらる丶こと
ともこそおほかれ
光君好色に練し給へる御心に
おもひしらる丶事有しと也
まことに人のいましめなるへし

」3丁ウ

342 おなしうは心きよくてとかくかゝつらひ
ゆかしけなきみたれなからんやたか
ためも心にくゝめやすかるへき
夕霧のた丶ならしとをしはか
り給ひて自他の名た丶ぬやう
にとの御異見のさま也是亦万
の人の心つかひを示す詞なるへし

」4丁オ

343 さかし人のうへの御をしへはかり心つ
よけにてかゝるすきはいてやと
光君色このみにおはして夕
霧をいさめ給へるゆへ此心の夕霧

」4丁ウ

にあるさま也子を教むとならは
父の身をおさめて庭訓をもな
すへきいましめなるへし大学曰
其所レ令スル反スレハ二其所レ好シ而民不レ従ハ是コノ
故ニ君子ハ有テ二諸己レ一而ニ后求ム諸人ニ
無シテ諸己ニ而ニ后ニ非ニ諸人ニ所レ蔵ル乎
身ニ不シテ恕ヲモンハカラ而能ヨクス喻ス二諸人ヲ一者ハ未タ之レ
有ル也といへり民をおさむるも子
を教るもをのれに善有て人の
善をせめをのれに悪なうして
人の悪をも正すへき也

」5丁オ

344うちいて聞えてけるをいかにおほ
すにかとつゝましうおほしけるとそ
おやに対して其御心にさはるへき
はゝかりあらん事はかろ〳〵しく
いひいつましきをしへなるへし

」5丁ウ

(38)鈴虫巻

345火とりともあまたしてけふたきま
てあふきちらせはさしより給ひて
空にたくはいつくの煙そと思ひわ
かれぬこそよけれ
空焼のやうを教給ふ也と細
流にも註せり女三宮の御方

」6丁オ

の女房物ふかゝらぬわか人ともなる
ゆへよろつのよういを教給ふ由也
346心ならぬ人すこしもましりぬれは
かたへの人くるしうあは〳〵しき聞え
いてくるわさなりけり
女心のあさはかなるかはしめは
人まねに尼をねかへと堅固に
とをるはまれ也あまたの中に
さやうの心定らぬ人一人もあれ
はかたはらの人をもみたして果
は名をたつる事出来ると也
尼にかきらす出家のうへすへて
よろつのをしへなるへし

」6丁ウ

(39)夕霧巻

347まめ人の名をとりてさかしかり給ふ
大将此一条の宮の御有さまを猶あ
らまほしと　是此物語の筆
誅の詞也実法の名を取て柏木
の上なとをもときし人なるを
さかしかり給ふと云也孟津抄云人
若き時はたしなめとも後には
さもなき也よく嗜めとの教也
348うたてもあるかなと宮はおほせと

」7丁オ

ことさらめきてかるらかにあなた
にはひわたり給はんもさまあしきこゝ
ちしてたゝをとせておはしますに
うたて覚えなから只音せて
おはしますは油断なるへしかく
あやうき所はすみやかに立さり
給ふへき教をかく也すへて女の在所
は心あるへきか宇治の大君のかへの
中のきり〳〵すもぬけの空蝉なと
の心つかひをおもふへし
349よそにきくあたりにたにあらす大
とのなとの聞おもひ給はんことよ
女二宮の憚りおほしめすへき事
ともをかきてかくいつかたにもよ
からぬ中をあるましきしわさなれ
は女かたにも油断あるへき事なら
す夕霧も遠慮あるへきこと
との心に此さま〳〵のはゝかりを女
二宮のおほしめす心の上にて書也
350かく何かしか心をいたしてつかふまつる
御す法にしるしなきやうはあらん
律師の高言也此詞に慢心あり
終に霊気を降伏せさらんこと

」7丁ウ

」8丁オ

」8丁ウ

をふくめたる書さま也
351すく〳〵しき律師にてゆくりもな
くそよやこの大将は
ゆくりもなくは不意とかく遠
慮なきさま也此事をかろ〳〵し
くいひ出て終に御息所を驚し
煩ひをおこして霊気其よはめ
にとりよる便りをえたりすへて
病者のあたりに物いはんに
病人の心にさはらん事をかろ〳〵
しくいふましきよしのをしへなるへし
352ありしやうをはしめより委う聞ゆ
小少将か遠慮なきさま也是亦
病者の心にさはらん事は心しつ
へきいましめ也はたして何にありの
ま、に聞えつらんと後悔せし有
さま是も筆誅して戒むる詞也
353律師もさはきたち給て
はしめの高言過言面目なからん
有さま又験者のみならすよろつの
道の人にも兼て可思之戒なるへし
354さま〳〵おほしいつるにやかてたえ入
給ひぬ　女二宮さま〳〵不幸におは

」9丁オ

」9丁ウ

」10丁オ

しますさま也朱雀院の姫君二
かたなからかく色々にさま悪く
おはしますさま心あるへし前ニ註ス
又細流云此物語かく験方にも
成就不成就をよくかけり悉皆
世間のありさま也
355 さかしたつ人のをのかうへしらぬやう
におほえ侍れ　柏木巻にさかし人
の上の御をしへはかり心つよけにて
かゝるすき心はいてやと夕きりの
思ひ給ひし首尾なるへし
356 此なめけさを見しきかしとおほしけ
れはおほとのへかたゝかへむとて渡り
給ふ　是雲ゐの雁のおも〳〵しか
らぬしわさ後悔の基なる事
を書て世の女のたけ〳〵しく
男の家を出ありくましきいましめ
をいふなるへし
357 よしかくいひそめつとならは何かはおれ
てふとしも帰り給ふ
是亦致仕のおとゝの本性にて
式部卿宮の物のけの北の方を
迎へ給へるかろ〳〵しさと事は

」10丁ウ

」11丁オ

」11丁ウ

かはれとも其あとは同し事に
成ゆく物なりよろしくはからひ
こしらへて早く男のもとへ返し給
へかりし物を女の男にとつくに
帰の字をかけり公羊伝註曰婦人
嫁〔シテ〕以レ夫ヲ為レ家故ニ謂テ嫁ヲ曰フ帰ト とあり
これらの道理にても男のさらぬ
かきりは男の家を出ましき物也
358 おほとのゝ君は日ころふるまゝにおほ
しなけくことしけし
雲井の雁也是案のことく後
悔し給ふさま也尤女のいましめ
なるへし男の心一向にかはりはて
て我をさりはてはせんかたなし
さもあらぬに疾妬(ママ)を忍ひかたき
はかりに三従の礼義をそこな
ひてみつからおとこのもとを出
帰るは大なるひか事也心を付侍へし
(40) 御法巻
359 紫の上いたうわつらひ給ひし御心ち
のゝちいとあつしくなり給て
若菜の下巻にて御ものゝけに
わつらひ給てのゝち也此巻にてう

」12丁オ

」12丁ウ

」13丁オ

せ給ふ事をかゝんとて也世の盛者
必衰会者定離の断(ママ)を示す也
360 法花経千部いそきて供養し給ふ
急きてといふ詞哀也うせ給はんの
心かまへに急き給ふ也出家の御い
とまをゆるされぬを我身の罪障
ふかき故にやとおもひとり給ふ
ゆへに此法事をいそき給ふなり
361 心ほそきすちは後の聞えも心をく
れたるわさにや
明石上例のかとある遠慮也
病者なとへ贈答せん心つかひ
尤かくあるへきをしへ也哥も此
よにねかふ法そはるけきとは紫
上の菩提のためにし給ふを明
石上は祈祷の心に取なして読る也
362 やかて此つゐてにふたんの読経せん
ほうなとたゆみなくたふとき
こと、もをせさせ給ふ
紫上菩提を忘れ給はぬ心つか
ひなり人々たれもかくあるへし
との教にかく也尋常の女は愚
痴にてかへりていま〳〵しと思て

」13丁ウ

」14丁オ

」14丁ウ

仏事なとかねてはせさる物なれは也
363 かきりもなくらうたけにおかしけ
なる御さまにていとかりそめに世
をおもひ給へるけしきにる物なく
紫上を此物語の中の第一にかける
に容儀心はせ相具して今臨終の
折にもやつれ給へるかたちなから有し
よりけに似る物なしといへり其上此世
の栄花にほこり万事心にたらひ給ふ
身には命も一入おしかるへきに生
者必滅の理をよく弁へて聊も輪
廻なき有さまなへてかくあるへき
教にかくなるへし
364 いふかひなくなりにけるほと、いひ
なからいとなめけに侍りやとて
御几帳ひきよせてふし給へる
紫上終焉に猶礼儀を忘れ給は
て中宮に敬有て御几帳隔て、
ふし給へるいけるかきり貞節有
礼儀あり男女老少かくあらま
ほしき有さま彼曽子の席を
かへつるためしも思ひよそふへし
365 御色はいと白くひかるやうにて

」15丁オ

」15丁ウ

」16丁オ

紫上生てのかたちはさら也臨終
死後までをつくせる書さま也
大論云臨終之時色黒者堕
地獄赤白端正者行天上等有
366 しにいる玉しゐのやかてこの御からに
とまらなんと
前に夕霧のしゐてしほりあけて
見奉る所にまことに心まとひ
もしぬへしとありし首尾也 」16丁ウ
367 世中にさいはいありめてたき人もあい
なうおほかたのよにそねまれ
わか寵愛せらるゝにほこりて人を
ないかしろにするゆへ人には妬まるゝ
に紫上さやうにはあらさりし也
是は人に対して御心よかりしさま也
368 よきにつけても心のかきりをこ
りて　わか富貴にほこりて物の
ついえをかへりみす人の煩ひをも
いとはぬゆへ人のくるしみとなるを紫
上はさもなかりし也是は家事に
つゝしみ有し心はへをほむる詞也女
も男も尤見習ふへきへき有さま也 」17丁オ

(41)
幻巻

369 紫上生前死後善つくし美つくし
たるを光君の恋慕給ふ有さま
をかける巻也歳始より除夜に
至るまて四の時々に付て哀悼の
御心はへをさま〳〵かけり夕顔上
葵上薄雲女院等の御愁傷に
文法をかへて一入の哀を尽せり 」17丁ウ
370 大将の君はやかて御とのゐに侍ひ給
夕霧の孝あるさま也高官高位
の人は身のおも〳〵しきにつきて
かやうの愁傷の折節の孝養の
上も大やうなる事おほし今大
将学問のしるし有て御おは大宮
の御事をはしめ父君につかう
まつり給ふさまも人にことなる由
を書て世人のいましめなるへし 」18丁オ
371 ゆくすゑなかきことをこひねかふ
仏名は歳末なれは罪障さんけの
うへに導師千秋万歳の祈念を
なす也然ともことし明なは入道
遁世の御心さし有けれは此世の
祈念を仏の聞給はん事片腹
いたしとおほす也此次の雲隠の 」18丁ウ

巻は名はかりにて其詞はなけ
れと嵯峨院に遁世の御事末
にみゆ其下心をこゝにいへるにや
372 其日そいてたまへる御かたちむか
しのひかりにも又おほくそひて
年始にも御心ちなやましきさ
まにもてなしてみすのうちにのみ
おはしまし御弟兵部卿宮はかりに
御対面あり其外は対面し給ふこ
とおさ〳〵なき由前に有然とも
ことし暮て春明なは遁世の御
心に是をかきりの御形をみえ給は
むとにや仏名の結願の日出まみ
え給ふさま也一入哀ふかきにや
373 物思ふと過る月日もしらぬまに年
も我世もけふやつきぬる
是としあけは世をのかれ入道
し給はん心有てわかよもけふやつ
きぬるとよみ給ふさま也世上の無
常変改の有さま盛者必衰
の有さまをくり返し示す物也
374(42) 雲隠巻
此巻名はかりにて其巻はなし

」19丁オ

」19丁ウ

」20丁オ

紫式部文法の奇妙此巻をかゝ
さるにあり其よし諸抄に在て湖
月抄ニ委然るに後人此巻を補ひ
て桜人巣守八橋刺櫛さかのゝ
上下なといふ巻々かける由なから
をそらくは狼藉寄怪（ママ）なる物な
るへし一向取用ゆへからす
375(43) 匂宮巻一名薫大将
此巻より薫の歳をもて年紀
をたつるに幻巻にては五歳な
りし雲隠巻のほとに九年こも
りて此巻にて十四歳元服（服）のこ
とあり六歳より十三歳の事は
雲隠の中に在と知へしさて十四
歳より廿歳の春までの事この
匂宮のまきにみゆ
376 ひかりかくれ給ひにしのち
花鳥餘情云光君さかの院に隠
居し給ひて二三年のゝち終に
昇遐し給ひしことをいへり（私案）
此発端より以下此巻の有さま
雲隠巻といふ巻はあるへくも
あらす只此巻より書出たる物と

」20丁ウ

」21丁オ

」21丁ウ

みえたり心をつけて吟味すべし
377なを心安き故郷に住よくし給ふ也けり
此詞のちに二条院に中君ををき
給ふ事をかくへき微意なるへし
378わか御心よりをこらさらんことなとは
すさましくもおほしぬへき御けしきな
めり　是亦中君のことなとかくへ
き微意とみゆ
379たゝひとりの御末のためなりけりと
みえて明石の御かたはあまたの宮
達の御うしろみをしつゝあつかひ
源氏の御身のすまあかしにおはし
なとせしもみな入道の祈願にて
住吉に宿願の故のよし前にみえ
たり其首尾の詞なるへし仏神
の信心利益深きことはりを云也
380ほの聞給ひしことの折々いふかしう
薫の実父は柏木なるよし内々人
の申きかせしことあるなるへし
かほるの宇治にて弁にあひてと
はすかたり聞給ふ事を書へき微意
也且又薫に一生道心有しも此故
としらせんかきさま也

」22丁オ

」22丁ウ

」23丁オ

381すこしなよひやはらき過てすきたる
かたにひかれ給へり
匂宮の本性をかき出たり始中終
好色の人におはしけり
382中将は世中をふかくあちきなき物
におもひすましたる心なれは
薫の本性をかけり柏木の後世
をすくはん心有て道心有しさま也
383(44)紅梅巻
此巻と次の竹川は匂宮薫なとの
光君の御のちにはよにめてられ
給ふ事をかけり
384をの〳〵御かたの人なとはうるはしうも
あらぬ心はへうちましりなまくね〳〵
しき事もいてくる時々あれと北方
いとはれ〳〵しう今めきたる人にて
つみなくとりなしわか御かたさまに
くるしかるへきことをもなたらかに
聞なし思ひなをし給へはめやすかり
けり　継子　種かはりの姉妹
の御中なれは御めのと女房な
とのくね〳〵しく心よからぬ事なと
あれとまゝ母の北方をとなしき

」23丁ウ

」24丁オ

」24丁ウ

人にてなたらかにことなくし
なし給ふと也細流にも此所を
ひとの教をかけるよしあり世
の継母のさかなきにいましめたる
詞なるへし女中にかきらす男の
中にも此わかかたさまに苦し
かるへき事をもなたらかにき、
なし思ひなをし給ふといふ所を
心をつけて見ならひ侍るへし
385 八のみやの姫君にも御心さし浅からて
宇治の中のきみの事也宇治十
帖をか、む微意なるへしこ、もと
は椎かもとの巻にあたれり
」25丁オ

386 故とのゝ情すこしをくれむら〳〵しさ
(45)竹河巻
過給へりける御本性にて心をかれ
給ふ事も有けるゆかりにや誰に
もえなつかしう聞えかよひ給はす
わか世に陰徳をつみをけは子
孫にいたりて陽報ある習ひ
をしらしむる詞也千金万巻を子
孫にのこさんも陰徳を冥々の
中につまんにはしかさるよし司馬
」25丁ウ

温公の家訓にあり彼于公か門
を高くし魏顆のために草を
結ひし老人のためしを思ふへし
かりにも人に情なくあたる事
あらんは子孫のためあしきたく
ひよにおほきいましめなるへし
」26丁オ

387 みつからのいと口おしきすくせにて思ひ
の外に心つきなしとおほされにしかは
玉かつらのわかゝりしよに冷泉院
の御位の時宮仕へし給ふへかりしを
ひけくろにすくせ有て本意たかへ
給ひし残念忘れかたくし給ふ心也
終に此心にて此姫君を蔵人少将に
あはせすして院参せしめまいら
せてさま〳〵後悔の事なとあり
」26丁ウ

388 今終に事ひきいて給ひてん
なと世のあさけりに逢給ひし
也わか私をさしをきてよによろしき
ほとをはからふへきをしへを書り
かろひたるほとに侍れとおほしゆるす
かたもやとなんおとゝも聞え給けり
蔵人少将の母北方は致仕のおとゝの
」27丁オ

」27丁ウ

御むすめ雲ゐの雁玉かつらの実の
御いもうと也おとゝとは夕霧也
いつれものかれぬ方にてかく詞を
くはへ給ふにはゆるし給ふへき事
にや又少将官位こそ浅からめ其
人からもめやすく行さき頼もし
き人なるをやされと冷泉院へ心
さし有て終ゆるし給はさりしか末
よろしからさる由を書て教とす
389そも〳〵女一宮の女御はゆるし給ふや
夕霧の此詞少将に此姫君をゆ
るし給はぬは物しおほしなから
其色をみせ申給ふへきならねは
只おとなしやかに大筋目はかりを
の給ひて猶はゝかりあるへきよし
をほのめかし給ふ有さま也院の御
事をの給ふにもさかり過たる心ち
すれとゝいひよろしう生いつる
女子侍らましかはと思給へよりなから
はつかしけなる御中にましらふ
物の侍らてなんなとの給ふもこの
はつかしけなる御中とは秋好中宮
こきてんの女御等のおはします事

」28丁ウ

」29丁オ

」28丁オ

也是も玉かつらの姫君を今はかは
かしき御後見もなき御有さまに
ては無用なるへき心をこめての給ふ
さま也わか御子の少将にゆるされ
ぬゆへ妨けさまにはの給ひにくけ
れは大やうにふくめての給ふ心也
390いさやはしめよりやむことなき人の
かたはらもなきやうにて
玉かつらの御まゝ子左近中将右
中弁なとも御むすめを院へまい
らせ給ふをあやしき事に思ひ
の給へと玉かつら同心し給はぬ有さ
ま也やむことなき人のかたはら
もなきを憚り給はゝ秋好やこき
てんをも其遠慮あるへきを
それには其心しらひもなくて
かくの給ふは偏に下心あれは也
391世にかたくなしきやみのまよひになん
此詞聞過しかたき所なれともと
かく院に心よせ有て玉かつらの
同心なき也後に悔み給ふ事をかゝ
むためにかやうにさま〳〵わりなき事
をかけり

」29丁ウ

」30丁オ

392 位なともあさえたるほとをなと覚す
是も蔵人少将のちに昇進して
玉かつらのまゝ子の君達うらや
むさまなる事をかゝむとて也
393 右の大殿御車御せんの人々数多奉れ
玉鬘のしわさは無曲けれとも
よそにみかたくておとなしやかに
し給へるさま也雲ゐの雁も同し心
也世にある事の有さま文意奇也
394 おほしとるかたことにてかうおほし
たちにしかはともかくも聞えかたく
て侍るに
母上のしわさのあやしかりしか
案の如なれはあはめ申さるゝ詞也
395 誰も〳〵ひんなからんことは有のまゝ
にもいさめ給はて今ひきかへし
玉かつら女気のし損しを悔みなか
らつれなしかほにの給ふ詞也女は
三従とて夫死ては子にしたかふへ
き道なるをはしめ中将弁なとの
いさめにしたかはてしゐて女心に
任せ給ひし事のよからぬを後人
の心すへきいましめにかけるなるへし

」30丁ウ

」31丁オ

」31丁ウ

396 右のおとゝもひか〳〵しきやうに
おもむけての給ふなれはくるしうなん
夕霧もわか御子の望みかなはね
は態さまたけさまにこその給は
ねあるましき院参なるへきよしは
ほのめかし給ひしを玉かつらも
心得給へと私の心ひくかたにて姫
君をまいらせ給ひて其末かくよ
からねは有のまゝにはいさめ給はて
との給ふ也大やうにて下には院
参を無用のよし夕霧の給ひし
事を玉かつらも聞知給へる故
かくほのめかさて有のまゝには
の給てと也
397 はやおほしたつへきになん
是も蔵人少将にいもうと君にて
なくさめんと玉かつらのの給ひし事
たかひぬれと又夕霧おとなしやか
にすちめの上にて返答の詞也
398 かきりなきさいはいなくてみやつかへの
すちは思ひよるましきわさ也けりと
おほうへはなけき給ふ
玉かつらの後悔し給ふさま偏に

」32丁オ

」32丁ウ

」33丁オ

世人のいましめ也身に応せぬ事は
すへて身の苦しみなるへき理也
399 聞えし人々のめやすくなりのほり
つゝさてもおはせましにかたわなら
ぬそあまたあるや
あなつり給ひし蔵人少将を初め
いつれも高官に成のほりて婿
にとり給ひてよろしきかあまた
有と也師説云はしめ玉かつらの
彼少将にゆるし給はて一念のた
かひによりてしたしかるへき夕霧
雲ゐの雁こきてん等の兄弟にも
恨みをむすひ今上の御けしき悪く
て中将弁なとの愁をのこし今は
みつから後悔し給へり世上に交る人
はおとこも女もほとよくはからふ
へしとのをしへなるへし
400 院のうへはうらみ給ふ御心たえぬそ
かし今つゐに事引出給ひてんと思ふ
院も猶昔を忘させ給はす玉か
つらもむかしを思給ふ心有て
姫君をもまいらし給へは終に
いさきよくはおはせしと草子地也

」33丁ウ

」34丁オ

」34丁ウ

是兄弟姉妹の中にも心つよくて
少将をいとひてひめきみを
院に奉り給ひしも昔を忘ぬ
ゆかりなりし事をいふへきとて也
此私心にて終に理を背給へは
をのつから後悔出来し心の諫也
401 いまはかゝることあやまりにおさ
なうおほけなかりけるみつからの心を
はしめ御息所院参のあらましの
時こきてんの女御懇にの給ひしを
頼み秋好中宮も源氏の御ゆかり
におほしゆるさんと頼み給ひて
女御后も下には物ねたみの心
なとかなからんの遠慮なくこと
にはか〳〵しき後見もなくて
院参せしめ給ひし事のみつから
悔きとの歎き也玉かつらの君
六条院におはせし時は実父のお
とゝ光君なと御在世にてよ
ろつつゝしみ深くいつかたにも
さまあしからしと心つかひし給ひ
し故女の本とたに定られ給
に今は髭黒たにうせ給ひて

」35丁オ

」35丁ウ

」36丁オ

誰には丶かり給ふかたなきま丶に
只我意に任せてのみし給ひ
しわさの人のもときをおひ給
やうになりてみつからも歎給也
若くても老の丶ちも万につ丶
しみふかくさまあしからぬやうに後の
有さま丶て遠慮すへき教也
402 宇治のひめ君の心とまりておほゆるも
八宮の御むすめ大君の事也こ丶
もと椎か本巻の中ほとに当れり
是も宇治十帖かくへき有増也
(46) 橋姫巻宇治十帖第一也
403 はかなき御あそひに心をいれておひ
いて給へれは　此宮の御伝へにて御
むすめ大君中君も箏琵琶す
くれ給へる事をいはんとてなり
404 か丶るほとにすみ給ふ宮やけにけり
はしめに北方うせ給ふ事を書て
又かやうの不幸をかく此宮の発
心のもと也次の詞にこ丶にはさ
へきにや只いとひはなれよと殊
更に仏なとのす丶めおもむけ
給ふやうなる有さまにてと有

」36丁ウ

」37丁オ

」37丁ウ

仏の方便にはかくうきめをみせ
て菩提におもむけ給ふ事ある
ことはりをかけるなるへし
405 そくなからひしりになり給ふ心をき
て　薫もとより道心あれと出家
成かたき身なれは俗なから聖に
八宮のなり給ふ御心掟を習はま
ほしとみ丶とゝめ給ふ也宇治に
ゆきかよひ給ふ事のもとい也
406 ひめきみの御かたに聞えてあは
れとの給はせはなんなくさむへき
薫俗ひしりの心はへを願ひてお
はしなから姫君にゆかしき心を懸
そめて終に好色の思ひに沈み
はて給ひし此うち十帖の趣向
のもと也世に若き人なとすこし
仏道の心さし有て物まうてなと
する人の道のゆくてに美色を
見てもとよりなまうかひなる
道心のかへりて好色の媒となる
たくひおほしまことに道心に
心さ丶は一向にあからめせて女人
はちこくの使ひよく仏の種子を

」38丁オ

」38丁ウ

」39丁オ

たつ心をしりをそれ侍るへし
407 さらによそに思ひやりしには似す
いとあはれになつかしうおかし
帚木品定にいかてはたかゝりけん
とおもふよりたかへる事なんあや
しく心とまるわさ也と有したく
ひ也伊勢物語におもほえす古郷
にいとはしたなくて有けれはこゝ
ちまとひにけりといへるも同じ
408 おこしつる老人のいてきたるに
ゆつり給ふ　弁のおもと也柏木の
めのとのむすめなれは薫にとはす
かたりせまほしき内意ありけれは
さし過てあいさつをも申也
409 君はひめ君の御返事いとめやすく
こめかしきを　はしめ雲のゐるみ
ねのかけちをと返哥し給へる所
に浅からす哀なりと薫のおほし
次にさしかへるうちの川おさと読
給ふ所にまほにめやすく物し給ひ
けりと心とまりぬれとゝあり
みるにつけ聞にしたかひて心さし
まさりけはひのゆかしさ添たる心也

」39丁ウ

」40丁オ

」40丁ウ

410 なからんのちもなとひとことうちほの
めかしてかは　草子の上にはいつ此
事の給ひしとはみえねと此後に
も此おもむきを宮の薫にの給ひ
し事あれは度〳〵参り給ひし
中に姫君の御事をかく一ことほ
のめかし給ひし事あるなるへし
411 聞えはけまして御心さはかし奉らん
是匂宮を宇治へいさなひ申中君
にあはせまいらせ後にはくひの八千
たひにて手習の君をさへいたつらに
なしさま〳〵のおもひをし給ふ事の
はしめ也すへて人の言葉は吉凶栄
辱これ其まねく所也とのいまし
めよくおもふへき物なるへし
412 そのつゐてにも句かくあやしう
此にもといふ詞前に姫君達の事
を宮の薫にの給ひし事有し
と知へし此次手にも又の給ひ出し心也
413 又人きかぬ心やすき所にて聞えん
柏木の事御母宮のうへなれはこと
人に委聞すましき心にてかくの給ふ也

」41丁オ

」41丁ウ

414 ひめ君はかやうのことたはふれにも
もてはなれ給へる御心ふかさなり
大君也八宮も薫の心さしあらは
ゆるし給はん御心にて薫にも其
おもむきの給ひけれと宮隠させ
給て後大君終に薫に難面て
はて給ひしはもとより此心なりし
故としらせたる詞なるへし
」42丁オ

415 すゝしき道にもおもむき給ひぬへき
をたゝ此御ことゝものいと〳〵おしく
此姫君達をおほしめす心宮の臨
終にもさはり給ひしと也総角巻
にひしりの夢にも此輪廻により
てえうかひ給はぬよしあり其微
意をこゝにかけり後世を思はん
人のいましめに書なるへし
」42丁ウ

416 なからんのち此君達をさるへき物の
たよりにもとふらひ思ひ捨ぬ物に
かすまへ給へなとおもむけつゝ
此宮の詞薫の心さしあらは姫君
をゆるし給はん心ありての給ひ
しなり其故に奥にさはかり御
心もてゆるひ給ふ事のさしもいそ
」43丁オ

かれぬよと薫の思ひ給へる事を
かけり此さしも急かれぬ心薫の
くせにて終に大君を得給はさりし
草子の有さま也
」43丁ウ

417 りやうしたる心ちしけり
宮御ゆるしの御おもむけをも
薫の聞置給へは偏に大君を薫
は我物に領したる心ちし給ふと也
されと大君に其心はへの宮の
遺言もなくたゝかろ〳〵しき心
つかひ給ふなとの御詞はかり聞置
給へは終に大君は薫に難面て
はて給ひし此あやにくなるとこ
ろ物語のふしなるへし男女の情
も偏に逢みるをのみいふ物かは
あはてやみにしうさをおもひ
なと兼好法しか筆跡あるにや
（一行空）
」44丁オ

418 過にし御おもてふせにかる〳〵しき
心ともつかひ給ふなおほろけのよす
かならて人のことにうちなひき此
山さとをあくかれ給ふな
此宮の詞はかろ〳〵しき事に
」44丁ウ

なひき給ふなとのいましめにて
薫にも難面くし給へとにはあら
さらめとも大君は其下心を知
給はねは只一人住にておはせとの
事と聞給ひしおもむきなるへし
あけまきの巻にも宮の薫へ
との御おもむけもなかりしよしを
の給ふ事あるはこゝの御遺言の故
なるへし此巻のおくにも思はす
なる事のまきれ露にてもあ
らはうしろめたけにのみおほし
をくめりしなき御たまにさへ
きすやつけ奉らんと姫君たち
のつゝましうおほしける事有

419 かやうにはもてない給はてむかしの
御心むけにしたかひ聞え給はんさま
ならんこそ　此薫の詞は宮の御
おもむけ大君をかほるにゆるす
御けしきなりしによりての給ふ也
此たかひめにて二人の御さま文悪也

(48) 総角巻

420 此の給ふめるすちはいにしへもさらに
かけてとあらはかゝらはなと行末の

」45丁オ

」45丁ウ

」46丁オ

あらましことにとりませての給ひ
をくこともなかりし
大君の同心なき故を有のまゝに
かたり給ふ也八の宮薫にはの給ひ
をく事有しかと大君にはたゝ
かろ〳〵しく人になひき給ふなと
はかりの給ひしかは也たとひ宮の
御心には薫にはまいらせんとおほ
すとも大君にはの給ふへくもあ
らねは大君の心終焉まてもこの
通りにて薫に逢給はさりし也

421 こよなうもてなしかたふて対面し
給ふ　よのつねの人の上ならはかく
一向に逢ましきと思ふ人には対
面もすましき也只人伝にのみさし
いらへもあるへけれとさやうにて
は何の情も哀もなく物語の
ふしもなけれはかくのことしかやう
にあやにくなる二人の御中あ
りさまなれはさま〳〵の情も
風流もある也

422 かくはあらてをのつから心ゆるひし
給ふおりも有なんとおもひわたる

」46丁ウ

」47丁オ

」47丁ウ

是薫の本性なり此心にて大君
にも終に本意をとけすもと
かしき有さまなりし此作物語
の一ふしなりかくて心のまゝにあ
らんは更にあやにくなる風情
も哀もあるましけれは也兼好法師
か男女の情もひとへに逢みるを
のみいふ物かはあはてやみにしうさ
を思ひなとかけるも此物語の哀を
うつせる物なるへし
423この老人のをのかしゝかたらひてけ
せうにさゝめきなとすさはいへとふか
からぬけにや　前にも例の御
そに奉りかへよなとそゝのかし
聞えつゝとあり大君深き心はへ
有て同心なきを弁なと大かたの
あらまほしくかつはめてたき御
事なれはもとかしく見奉りさい
まくるさま也姫君達のうしろみに
て物馴たる弁なから猶深き心
はせをくれたるか又老てひかめ
るにやと草子の地にいふ也たとへ
は大君薫の北方に成て京に出

」48丁オ

」48丁ウ

」49丁オ

給ふとても誰うしろみまいらす
る人もなけれは物の折ことには
人わろき事もあるへしさすかに
宮の御むすめにてそゝろなる
妄風情のやうに薫の御心む
けはかりをたのみてはかひなきわ
さならんとおもへる大君の深き心
はへあれは同心し給はぬは理り也
中君匂宮に向へられ給ひしも
薫の浅からすうしろみ給ふ事の
故にてこそみくるしからすおは
しけれそれたに六君おはしては
中君も宮の御遺言を思ひ出て
宇治にや帰らんともおほし大君
の心ふかゝりしを感し給ひし悔
みとも有し也まして女二宮の御
事は帝の御心むけなれは薫も
辞し申かたくてうけひき給ひ
なんには大君の有さま必中君
の後悔より猶まさりてこそ歎き
給はめされは遠きおもむはかり
有てちかきうれへをとり給はぬ
かたまさりたる心ふかさなるへし

」49丁ウ

」50丁オ

」50丁ウ

前にほまれあらんよりはしりへに
そしりなからんにはいつれといへる
心はへ誰も思ふへきことはりにや
弁なとの只今のめてたき事はかり
を思ひて後の変を思ひやる心
つかひのなきをろかさをいへる草
子地の詞なるへし

424まつゆつり聞えて　薫の心也
中君を匂宮にまつゆつりまい
らせてと也此あやまりにて終に
中君をも大君をも薫のとりは
つし給ひて後悔たひ〳〵なりし其
上浮舟の君の事にはかなき歎
きし給ひしも皆此しわさ一つ
より出来たり是柏木のあや
まちの薫にも猶むくひて
中君浮舟の君ともに匂宮に
依てあやしき悔をも歎きを
もし給ふ有さまを書て不義の
ふるまひをいましめたる心なるへし

425弁もまいりてみちひきゝこゆ
弁か深からぬ故の有さまなり
薫のおはして大君に物の給ひし

」51丁オ

」51丁ウ

」52丁オ

に匂宮のまきれ給ふには気を
付へき所也かつ心をつけん人いかて
見損してみちひきし侍らん

426われもやう〳〵さかり過ぬる身そ
かしかゝみをみれはやせ〳〵に
此わたりの詞おくに薫に対面
し給ひてわかおも影にはつる比
なれはとの給へることをいはん微
意にや

427つねよりもわかおもかけにはつる比
彼かゝみをみれはやせ〳〵になり
もてゆくとありし詞の首尾也
宇治十帖第一の詞なるへしと
細流にいへり

428いかてなくなりなんとおほししつむ
此大君かやうにおもひよはり給へる
よはめに此宮の御座敷に悪霊
有て見入たるなるへし手習の
巻にて手習君の霊の顕し時
ひとりをは取つるよしいへる此女君の
ことなるへし

429おまへに人おほくもさふらはす
女宮の御前に人のさふらはぬは

」52丁ウ

」53丁オ

あるましき事とのいましめ也
430 若草のねみんものとはおもはねと
むすほゝれたる心ちこそすれ
匂兵部卿宮そゝろに物くるはしき
まて色におはしますことをかけり
いもうと宮にけさうの哥よみ給ふ
は人倫のあるへき事にあらす
かくすゝろはしき御心ゆへにまめ
やかなりし薫の隠しすへ給ひし
手習の君をもかやうの不義の
こと有しとの心にかけるなるへし
此宮は帝きさき御寵愛あさ
からて春宮にもとおほしけるに
終に立坊のことをかゝす是かく
道理に背きたる御心からのわ
さといましむる心なるへし
431 うらなく物をといひたるひめ君も
伊勢物語にては業平のいもう
とにけさうにはあらす憐（怒カ）※［恨＋心］
の心なり女の返哥も懸想までの
心にはあらぬを態けさうの心にて
うらなく物をといひたる姫君も
されてにくゝおほさるといへり

」53丁ウ

」54丁オ

」54丁ウ

兵部卿宮なとやうの好色の御心
にてはいせ物語の業平の妹をめ
くみてよめるをも好色に見な
し給ひて此女一宮の御あへしら
ひもなく貞節なるに感して
にくゝおもひ給へる心也
432 此君の御供なる人のいつしかとこゝ
なるわかき人をかたらひよりたる
有けりをのかしゝの物かたりにかの
宮の御忍ひありき制（ママ）られ給て
大君の御病ひおもり給はんと
てさま〳〵の事さしつとひて弥
心をまとはし給ふさま也前に匂宮
宇治へおはしなから立より給はん
よしなきやうになりて帰り給へる
をはしめにて此六の君の御事
も宮の忍ひありき制せられ
給ふ事もみな大君の御胸
ふたかる事のたね也此後に
も中君の夢に八宮の物おほし
たるけしきにてみえ給ひし事あ
さりか夢に聊うち思ひし事に
乱てなんたゝしはし願ひの所を

」55丁オ

」55丁ウ

」56丁オ

へたゝれるよしを見たる聞給ひ
しなとさま〳〵大君の歎きの事
さしつとひて終に本復なかりし
有さま是皆よに悪くなるへきこ
との時節にはさま〳〵の事さしつ
とふ有さまをかけり哀を尽せし
筆力なり

433 これのみなんうらめしきふしにてとま
りぬへくおほえける
大きみ末期まて猶恨晴給はて
薫にとけすして果給へるさま也

」56丁ウ

434 みるまゝに物のかれゆくやうにて
きえはて給ぬるはいみしきわさかな
愛別離苦の人間の世の有さま
を人にしめす書さま也

」57丁オ

435 み奉り給ふにかくし給ふかほも只
ね給へるやうにて
前に物覚えす成にたるさま
なれと顔をはいとよく隠し給へ
りと有て又かほかくし給ふ御袖
をすこしひきなをしてと書て
うせ給ひてのちもさなから顔
かくし給ひし事をかけり最後ま

」57丁ウ

ても薫になひかてへたて給へる
事をかきかつ大君の心ふかき御
用意を見せたるなるへし

」58丁オ

436 (49) 早蕨巻
なかむれは山よりいてゝゆくつきも
よにすみわひてやまにこそいれ
月は山を出ても世にすみ侘ては
山にいるに宇治山を出てゆく我も
思惟すへきことそと也宿木巻
六君を匂兵部卿宮のいれ奉り
給へる所に宇治に帰りいらんと
中君あらまし給ひて薫へ其由
申給ひし事あるも中君此哥の
心はへ始終おはする故の有さま筆力
寄(ママ)也妙也

」58丁ウ

437 (50) 宿木巻
其比藤つほと聞ゆるは
藤壺女御は今上女二宮の御母也
女二宮は薫の北方にまいらせ給
其事をかゝむとて書出たり扨
女二宮の御事をかくはかく帝の
御むすめをえても猶大君の忘
かたきは慰ます浅からぬ心さし

」59丁オ

をいはんとての心としるへし
438 まつけふは此花一枝ゆるすとの給はすれは
姫宮をつかはさんとおほせと薫
の心さしをも御らんし知す
かつ急々なれはとの心にて先けふ
は此花一枝をつかはさるゝとの
御心也先といふ詞心をつくへし
439 やう〳〵おほしよはりにたるなるへし
匂宮の好色にて中君をわりなく
してえ給ひて御心さしも浅から
されとも又六君にも御心離ぬ
ゆへおほしよはりたるなるへしと
書て其まゝあたなる御心なれ
はと書つゝけたりおほしよはる
にはやあたなる御心あれは也
440 返す〳〵も故宮のの給ひをきしこ
とにたかひて草のもとをかれにける
匂宮に逢初給ひしは中君のわさ
にもあらさりしかとも兼てにも此
思案あり逢給ひて後も此あやふ
みあれは返す〳〵もといへり又大君
の心のおもさをいはんとて也すへて
身に応せぬさいはいをねかふは愚か

」59丁ウ

」60丁オ

」60丁ウ

なる物のわさなるへしたとひよ
きになりても此中君のあや
ふみのことくやすからぬ思ひ絶す
としらしめんとての事ならんかし
441 猶此御けはひ有さまを聞給ふたひ
ことになとてむかしの人の
中君を匂宮にまいらせし後悔也
さるへき故有とも兄弟親子の
むつましき人ならては女中に
心やすくちかつくましきいましめ
也必此心あるへけれは也薫のこと
きまめ人たにしかりましてこと人
は仲人なとまてせしむつましさ
をも心ゆるすましきことなるへし
其いましめの心則おくにあり且
又心さしをたてゝすこし道の心も
あらん人は人のゆるして近つくる
とも男女の中は道ある事なれは
遠慮してちかつくましき事也
442 みつからとさへの給へるかめつらしく
薫中君にまよひ給ひてかくこゝ
ろあさき人に似たるをこかましさの
ある事をかきて後人のいましめと

」61丁オ

」61丁ウ

」62丁オ

するなるへし次の詞にさは年比
のしるしもやう〳〵あらはれ侍る
にやとの給へる片腹痛きわさ也

443 かつはいひうとめ
中君にまよひ給ふゆへ初め匂宮
に大切の媒のさまとはかはりてをこ
かましき有さまを書て世人必かゝ
る心さしを持ましきいましめとする也

444 御袖をひかへつ
此段師説湖月抄にあれは略之

445 さはかり心ふかけにさかしかり給へと
おとことといふ物の心うかりける事よ
是男にも女にも遠慮あるへき
いましめの詞也

」62丁ウ

446 何ことにかといふまゝに几帳の下より
中君は浮舟君の事を語出給はん
とての給ふ事を中君にまよひ給
薫の心より我になひく御心かとお
もひ給へるふるまひ也偏にいましめ也

447 ふたりして栗なとやうの物にやほ
ろ〳〵とくふも　女なとのしらぬ所
にて誰かみるらんもしらてさも
しく物くふましきいましめ也

」63丁オ

」63丁ウ

(51)東屋巻

448 いと人きゝかろ〳〵しうかたはらいたか
るへきほとなれはおほしはゝかりて
高貴の人の其ほとに似合さる
ふるまひは世の聞え人のおも
はくもよろしからねはすましき
ことのいましめに薫の此遠慮
あることをかけるなるへし

449 こたひの頭はうたかひなくみかと
の御口つからこて給へるなり
仲人の空言世上なへての習ひ
なれはかれかいふまゝには聞とる
ましく思ひはからふへき教にかけ
るなるへしすへて其ほとならす
過分の事を人のいふにはあやし
と心をつけてかんかへはからふへし
あやしと心の付事を今一たひ
思案せされは失をとる事おほ
きものなり

」64丁オ

450 屏風のつまよりのそき給ふ
師説湖月抄にくはし

451 物つゝみせすはやりかにをそき人にて
此乳母の事を浮舟巻にても匂宮

」64丁ウ

452 思ひいて給ひしこゝの事なるへし
かたはらいたきことゝ思給へてかまの
さうをいたして　前に物つゝみせ
すはやりかにをそき人にてと
と有し首尾也
453 大宮此夕より御むねなやませ給ふを
前にきさいのみや例のなやま
しくし給へはと有し首尾也文
法妙也
454 なこりおかしかりし御うつりかも
浮舟巻にて宮に心つよかるま
しき心はへかねてみえたるさま也
455 心ゆく道にいとむつかしき事
そひたるこゝちす
世に物を気に懸るといふ事也
浮舟君宇治へおはする始めに
かやうの事あるは行末よかるまし
き前表との心也前に浮舟の事を
かたしろとの給ひしことを後に
も不吉の事に薫の思合せ給へ
る事あり此次にも楚王の台の
上夜の琴の声と吟してさるは
扇の色も心をきつへき閨の古を

」65丁オ

」65丁ウ

」66丁オ

はとありかた〳〵末よろしかるまし
きしるしあるやうの書さま也
(52)浮舟巻
456 例のいとのとけさ過たる心からなるへし
のとけき心は温和なれはよき也
過たるは猶及はさるかことし
此薫のくせの失あるにて人に
いましめたる詞也
457 あやしきまて心をあはせつゝゐてあ
りきし人のためうしろめたきわさにも
湖月抄云好色にまよへる人の不
仁不義におちいる事をしるして
いましむる也云々匂宮の頼もしけ
なき御心はへ民の父母なるま
しきありさまをいひて後人の
心をはけましむる詞なるへし
458 おもひもよらすかいはなつ
女とちすむ所にてはよろつ心をつ
けてかやうのあやまちする事な
かれとのいましめにかけるなるへし
此物語は作りことなから河海に
ひく所の義孝少将の通ひける
所に兵部卿致平親王まかりて

」66丁ウ

」67丁オ

」67丁ウ

少将の君おはしたるといはせし事
は実事也されは世にある事な
れは返す〳〵心すへき事なるへし
459 君（ママ）はあらぬ人なりけりと思ふに浅ま
しういみしけれと
浮舟君貞節の人ならはあらぬ
人とみるよりいかにものかるゝやう
はあるへけれと薫も此巻の奥
に色めきたるかたはそひたる人
そかしと思ひ知給ふ事有且又
東屋巻にもあやにくたち給へ
りし人の御けはひもさすかに
思出られて何事にか有けんいと
おほく哀けにの給ひしかな名残
おかしかりし御うつりかもまたのこ
りたる心ちしてなとあり匂宮に
ひかるゝ心もそひたる人の有さま
なれは此ときもはか〳〵しからて
終に身のためあちきなき事に
なりにたり貞女二夫をかへすといふ
事は偏に万人のいましめと知へし
460 心もなかりける夜のあやまちを
思ふに心ちもまとひぬへきを

」68丁オ

」68丁ウ

」69丁オ

実に留守なと女とちある人の用
心を教ゆる也
461 いまはよろつにおほゝれさはくとも
かひあらし物からなめけなり
此右近かのめのとの降魔の相を
いたせしことく真実に主
君浮舟をおもふ心ある正しき物
ならはこゝにてたにはか〳〵し
く宮をいさめて返しまいらす
へしわか頼む薫に不忠不義を
忘れ浮舟君にため悪き事を忘
て只宮に無礼也なと思ひて心を
あはせ偽のはかりことをなしつゝ
終に浮舟君をいたつらになしはて
たるははかなき有さまを書て
後人のいましめとす
462 此人よにしらす哀におほさるゝ
まゝにはよろつのそしりをも忘給ぬへし
前にも京にはもとめさはかるとも
けふはかりはかくてあらんと有し
首尾也此段師説湖月抄に委
463 けちかきさまにいらへ聞えなとして
なひきたるを

」69丁ウ

」70丁オ

」70丁ウ

まへに心さしふかしとはかゝるをいふ
にやあらんと思ひしらるゝなと
有たとひ心さしふかくともわか
もとつ人をゝきてたかまことを
頼むへきとかたく思ひ(ママ)とりてこそ
二夫をかへぬ節婦の名はとゝむ
へけれはかなくをろかなる心なる
へし今の世にても貞操を忘
てあたなる密夫にまよふ女は
みな此浮舟の君のことく身の
はてはかなからん事を書て人を
貞女の道にみちひくなるへし
464 大との、君のさかりに匂ひ給へるあたり
にては　此段の師説湖月抄ニ委
465 こまやかに匂ひきよらなる事
此段の師説も湖月抄に有
466 かねてかうおはしますへしと承り(ママ)ま
しにもいと忝れはたはかり聞えさせ
右近か有さま彼乳母とは雲泥
の心あり主君をいたつらになし
まいらせしもむへなるさまを書て
後人の女の後見なとせん心はへ
を教ゆるなり

」71丁オ

」71丁ウ

」72丁オ

467 何ことも人よりはこよなうまさり
給へる御さまにてすゝろなる事
おほしいらるゝのみなん罪ふかゝりける
例の筆誅也世俗にも万能一心
とかやいへり敬の字を忘へからす
468 御ともの人もなきぬはかりおそろ
しうわつらはしきことをさへおもふ
かゝる道の空にもし不慮の狼
藉もあらはとおそろしく且又か
く大切の宮を此難所の雪道ニ
御供申せし聞えあらは各のとか
なるへき事を煩らはしく思ふ也匂
宮一人好色のつゝしみましまさぬ故に
あまたの人をなやまし給ふあちき
なさを書て主君なるへき人は下
下の上までおもひやりてよく独を
つゝしみ給ふへき教を書なるへし
469 右近いかになりはて給ふへき御有さま
にかとかつはくるしけれとこよひはつゝ
ましさも忘ぬへし　先度一夜は是
非なし今夜も亦宮に逢給はゝ
たひかさなりて若聞えなとあら
むにいかに成果給ふへきとくるしな

」72丁ウ

」73丁オ

」73丁ウ

からと也此右近はか〳〵しき心あ
らはこゝにてきといさめ申へしいか
に成果給はんとたに思ふ事を心よ
はくあやまりかさねたり果然とし
て浮舟をしつめ申せし也あやま
りは早く改て悪事を可謹教也

470 恨給ひしさまの給ひし事とも面影に
つと添て聊まとろめは夢にみえ給つゝ
世の密夫を思ふ女のさまなへてかく
こそあらめはては身をうしなふに
至る悲しむへし

」74丁オ

471 いつしかと思ひまとふ親にも思はすに
心つきなしとこそはもて煩らはれめ
身をたて道ををこなひて親の
名をもあくるこそ孝行のはしめ
と聖人もの給ひつれかくさま〳〵
心をつくす親にももてわつらはれ
物を思はする事只一念の不義よ
りをこるわさそとしらせて親の
孝を思はん人は不義悪行をつゝ
しむへしとのをしへのためと知へし

」74丁ウ

472 雨ふりし日来あひたりし御使とも
そけふもきたりける

」75丁オ

是たひかさなれはあらはるゝ道理
を書て改過の心なき人のあちき
なさを人に示す也人しらしと思ふ
事も思はすにあらはるゝさま皆
かくのことしされはおほし(ママ)すして
なしたるわさも不義なりといふ
事をしらは即時に改めて其後
をたにつゝしむへしもとよりなさ
さるさきに不義をしらは湯をさく
るかことくおちをそれて手をたに
ふれすやみ侍るへし若知つゝも不
義悪行をなさん人は親に不孝
君に不忠仏神にも疎まれ果侍へし

」75丁ウ

473 あゆみ出給ふまゝに何事そと問給ふ此
人のきかんもつゝましと思ひてかしこまりて
をる殿もしか見知給て出給ひぬ
此随身かと〳〵しき物にてと有し首
尾也次第の心つかひ皆かとあるさ
まを書て人の従者の心つかひを
教ゆる也薫も其けしきを見取
給ひてしゐてこゝにて問給はさ
りし臣臣たれは君々たり是また
人に見習はしむるわさなるへし

」76丁オ

474 人のため後のいとおしさをもことにたと
り給ふまし　匂宮の本性のくせを
思給ふ也只今の御心にかなふやうは
かりにて後に人の煩ひなるへき遠
慮おはせぬ宮也浮舟をわりなく
盗み出ん必心を合せ給へと押立て
の給ふも浮舟の身のため害なる
へき遠慮もおはせぬさま也浮舟も
しゐてかやうにし給はゝ人聞はち
かましきこと出来なんとはたはり
なき女心に歎きあまりて終に身
をなけん心いてきたる有さま也
」76丁ウ

475 すゝろならんものゝはしり出来たらん
もいかさまにかと　まことにあやう
き御有さまあるましき事を書て
恋地(ママ)にまとふ人遠慮あるへきい
ましめにかけるなるへし是皆作
物語なから兵部卿宮の本性にては
必かやうにあるへき物のいきをひを
よく書いてられてまことに現在あ
りし事のやうにみえ侍り又寄(ママ)妙也
」77丁オ

(53)
蜻蛉巻

476 なとかさしもめつらしけなくはあらんと
心つよくねたきさまなるをまめ人はす
こし人よりことなりとおほすになん有ける
なへて匂宮になひかぬ女はなきに小宰
相はなとかさしも珍しけなく人なみに
はなひきまいらせんと貞節なるを薫
は寵異し給ふと也浮舟のあたなりし
に対してかくおほす有さまなるへし
千万人のなひく人にもわか心たに貞
節ならは誰か数寄事をもすへき
只其女の心一つのわさと教ゆる心
なるへし奥に見し人よりも是は
心にくきけそひてもあるかなと
あり是亦浮舟に対してかけり
」78丁オ

477 めたうのかたのさうしのほそくあき
たるより　女一宮の御方は紫上の
そたてまいらせ給て明石中宮の
御掟もくはゝれはかくそさうの
事はあるましきわさなるに下臈
女房のとみの事にてあけなから
おりにける也下らふの心つかひ
のしとけなく物なれぬ有さまを
書て例の又いましめにかくなるへし
」78丁ウ

478 心つよくわりて手ことにもたりかしら
」79丁オ

にうちをきむねにさしあてなと
是次さまの人のさまあしきさま也
中〳〵物あつかひにいとくるしけなり
たゝさなからみ給へかしとて笑ひ
たる小宰相かさまのしつまりて
人よりことに用意あるをいはんとて書る也
479 かゝるすちに御身をもてそこなひ人
にも心つきなき物に思はれ給ふへき
匂宮を春宮にもとおほせとその
器におはしますましきにやと歎き
給ふ詞なり心をつくへし
480 君にもいひ伝へすさかしたちて
宮仕へ人の心つかひの教にかけ
り薫なとやうの貴人にはうち
つけにかくいらへすへきにあらす
無礼のわさなり宮の君にいひつ
たへて其口うつしをこそ申へきわさ
なれされは次の詞になみ〳〵の人
めきて心ちなのさまやとかほるの
おほしたるよしあり
481 松もむかしのとのみなかめらるゝにも
是宮の君のみつから直に薫に
申給ふ答へ也これ亦さしも式部卿

」79丁ウ

」80丁オ

」80丁ウ

宮の御むすめにてはかろ〳〵しき
わさ也此女房してこそ答へさせ給ふ
へけれされは次の詞に只なへての
かゝる栖の人と思はゝいとおかしかる
へきを只今はいかてかはかり人に
声かきすへき物とならひ給ひけん
となまうしろめたしと有さてこ
こに此ことをかくかける心は前に女
一宮の御かたの事をいふに猶此御
あたりはいとことなりけるこそ
あやしけれ明石の浦は心にくか
りける所かなとほめて其対に
此宮の君さしも式部卿のいつき
むすめにて有したにかくかろ〳〵
しき所ある事をいひて明石上の掟
のおも〳〵しくよし有ける事を
いよ〳〵いひ此次に宇治の宮の御
むすめたち大君中君かたほなら
さりしをいはんとて決前生後の心
はへにかけるなるへし
482 (54)手習巻
されと観音とさまかうさまにはくゝみ
給ければ　はくゝむは鳥の子を

」81丁オ

」81丁ウ

」82丁オ

母鳥の羽につゝみいたはる心よりい
へる詞也此浮舟君の立願に母の
毎年に初瀬に詣させし帰さに
宇治にて薫見初給ふ事宿木巻
に有又東屋巻に二条院にて乳母
の詞にされと観音おはしませは
と頼みをかけし事あり浮舟巻に
も右近観音を事なくあらせ給へ
と浮舟君のために祈りし事又
ことなく暮させ給へと初瀬石山に
願かけしといひし事も有此巻にも
初瀬にて尼君霊夢有て帰さ
に宇治にて此君を拾ひて観音
の給へる人也といへりし事ありこゝ
にてすてに物のけのとりまいらせん
とするにとかくはくゝみ給ひてと
いへり大悲の力頼もしき験をいふにや
483あたしのゝ風になひくなをみなへし
中将心おこりして勿論なひくへき
人と思ひて我しめゆはんなと押
たちてやすけによめるさま也
484あま君はやうはいまめきたる人にそ有
けるなこりなるへし　此有さま世を

」82丁ウ

」83丁オ

」83丁ウ

捨たる老尼に似合されは也手
習君すてに五戒をたもち額は
かりなれとも出家のしるししたる
人にまことの比丘尼ならは態菩
提をもすゝむへき物を堕落
をすゝむる事尤むすめのかはり
と養ひて中将をしたふ心に
ひか事（ママ）（ママるカ）ゝといへとかの僧都の堅
固に女のすちにつけてまたそ
しりをとらすとの給ひ又何かし
此しるへに付て必（ママ）をつみをえ侍らん
なといへりし心にはたかひたれは也
此次の詞にもさすかにかゝるこたい
の心ともには有つかす今めきなと有
485わかやくけしきともはいとうしろめたう
此尼君をしたる媒もせんかと心
もとなくおほすと也此うしろめた
う覚ゆといふ詞二所に有奥なる
は少将尼をうたかふ心也心は替る也
486是のみそいける仏はしるし有てお
ほえ給ける　浮舟君初瀬にまうて
給へりしかと此世のための祈は
かひもなく不幸なりしに入道の

」84丁オ

」84丁ウ

」85丁オ

ほいとけて菩提におもむき給ふ
はかりはしるし有て覚え給ふと也
尼君初瀬にまいらすは必此本意
とけさせ申ましきに初瀬の留守
にしも此本意のかなひしは是も
仏の方便なるへけれは也前に浮
舟の君あまになし給てよさて
なんいくやうもあるへきと尼君
にの給ひしにいとおしけなる
御さまをいかてかさはなし奉らんと
有しをおもひあはすへし

487かやうなる事をおほし急くにつけ
てこそほのかにあはれなれ
此詞おもてのうちきゝは此よのつ
ねの色なる衣裳を急きいとなむ
につけてわか昔の事少思ひ出ると
大やうにいひ給へると聞えて若な
くならん跡にても浮舟君なりしと
尼君聞合む時はかやうのわかため
の追善のいとなみをみるにつけて
わか身即それなれはほのかに哀
に思ひ出るとの給ふ事の心になる
詞也さて隠さゝりし由をいふ詞也

」85丁ウ

」86丁オ

」86丁ウ

488ましてこと人はいかてかと聞えさす
小宰相か心つかひ神妙也中宮のつゝ
ませ給ふらん事を宰相申さいまく
らん事君に憚りある儀也宮仕
人の心つかひのをしへにかけり

489かの事またさなんと聞つけ給へらは
此詞今手習の君を匂宮の物に
しをかせ給ひけんといふにおとしつ
けての給ふ也かくの給ひてはたとひ
匂宮の物にておはすにてもとか
なしましてさもなけれは大宮の御
返答の有さまにて匂宮のしらせ
給はぬ事としらるゝなれは心見に
かくの給ふ詞也面白き心はへ也

490聞えんかたなかりける御心のほとかな
此詞大宮の匂宮のまさなきしわ
さを薫に謝し申給ふ心あり

491かゝるすちにつけていとかろくうき物
にのみ世にしられ給ひぬめれは心うく
匂宮の有さまの世の聞え東宮
にとの御本意のやうには有難けな
るを歎かせ給ふさま也好色にふける人
の終に身のためあちきなきいましめ也

」87丁オ

」87丁ウ

(55)夢浮橋巻

492 此巻の名の事湖月抄に委
493 おとしをき給へりしならひにとそ
細流云かやうにして行末をかゝさる
は見はてぬ夢のさま甚深微妙の
趣向とみえたり　私案　かく見果ぬ
夢の残おほかる書さま餘情限なし
手習君生て世に在なからかく様々
の哀深き薫の行末もしらておはす
へきも本意なかるへきにかくはかり
聞出尋給ひては既に今一度逢見
給はん斗也逢み給はんに付ては
かく世を捨形をかへ給ひし人の御事
薫も仏道には心深き人の何の昔
に帰る情もあらん且又匂宮のうき
事を薫も慥に聞出給へり手習
君も薫に其事きかれ給て何の
面目有て二たひ対面のかひある
情をみえ給はんたかひの心にもあ
はてやみ給へる由の書さまこそ
哀深く巫山の神女か雨となり雲
となりけん幽玄の面影して実に
深甚微妙には覚え侍れ是誠の夢

」88丁オ

」88丁ウ

」89丁オ

の浮橋には侍るならし然るに此巻
のかく残多くてやみにしをほいなく
思へる後人のわさにて山路の露と
かや一巻書添て此比よにみえ侍し
是式部の筆の絶妙の所を知さる
のみにあらす後学のみる目をおほ
ひくらます事はなはたし彼束皙
か南陔白華華黍由庚崇丘由儀
の補亡の詩を文選にのせられたる
たに朱子の詩の集註にはとらす須
渓劉氏も南陔の六詩はもとより
たゝ声のみ有て其調はなきを
束皙か補亡いはれなしとて笑ひ
たりけるたくひなるへし

」89丁ウ

」90丁オ

元禄七年八月十五日向南月下染筆而
同年十月廿五日北野影前終功畢
法眼季吟

」90丁ウ

元禄八年六月三日重而清書之

源氏物語日本紀准拠物語中以日本紀之古事書所多而委註諸抄今略之
問河海抄云此物語を始め一条院御覧
有て不可説之物也式部は日本紀を

よくこそみたりけれと仰らる時に左
衛門内侍此綸言を妬て日本紀の御局
と号せり云々紫日記に此事を戴た
り此事源氏物語のいかなる所の日本
紀に似たる事有や答是此物語の
大体桐壺帝より初て帝王四代の年
紀七十餘年の興廃を書る所すへて
日本紀の有さまに似たり又しゐて其
准拠をいはゝまつ桐壺帝更衣光君
をうみ給ふは陰神陽神の日神をう
みしに准すへし其故に光君といふ名
あり日本書紀云於是共生二日ノ神一号二大日
霎貴一此子光華明彩照二徹於六合之内一
云々又光君の御弟冷泉院を月神
に比せり日本書紀ニ次生二月ノ神一其光彩亜
レ日ニ可二以配一レ日ニ而治一云々そのゆへに紅葉賀
巻に光君と冷泉院の御事をいふに
けにいかさまにつくりかえてかはをとら
ぬ御有さまは世にいて物し給ふへき月
日のひかりの空にかよひたるやうにそ
世の人おもへる云々又光君すまの巻にこの
かみの朱雀院の御宇に須磨の浦に
おはしまし住吉の神の道ひき給ふまゝに

」91丁オ

」91丁ウ

明石巻にてあかしのうらにおはし前播磨
守新発意いつきいれ奉りて其むすめ
あかしの上に逢せ申てみこ出来たる事は
日本紀に彦火々出見尊このかみの火闌
降命の其もとの鉤を責ることの
故にて海の畔に吟行給ふに塩土老
翁のはかりことにまかせて海の宮に
至り給ふに海神は重畳をしきてい
れ奉り其むすめの豊玉姫にあはせ申
てみとせおはすほとにうかやふきあはせすの
みことはらまれ給へるに比す又明石の姫君
いまた生れ給はぬほとに光君帰京し給ひ
て後彼浦にて生れ給へりしもうかや
ふきあはせすの尊もひこほゝてみのみこ
と帰り給へる跡に海浜の産屋にて生れ
給へるさまに似たり彼明石巻に光君
の御さまを明石上の思へる詞にさうしみは
をしなへての人たにめやすきはみえぬ世界に
よにはかゝる人もおはしけりと見奉り
しにつけて身のほとしられていと
はるかにそ思ひ聞えける云々日本紀
に豊玉姫彦火々出見尊をみていへ
る詞に骨法非常若従天降者当レ有二

」92丁ウ

」93丁オ

」93丁ウ

天垢（アメノカホ）従（ヨリ）地来（ツチノホレラハ）者当（ハ）二有（レ）二地垢（ツチノカホ）一実（マコトニコレマク）是妙
美之虚空彦（ハシソラツヒトノモノカ）者歟（云々）此明石上を都に
むかへ上せ給ひて紫上の妬みを憚りて
しはし大井の川辺にをきて時〳〵通ひ
給ひしこと松風薄雲等の巻にあ
るは允恭（インキヤウ）天皇衣通姫（ソトヲリ）をむかへとり給
ても皇后忍坂大中姫（ヲサカノオホナカツヒメノミコト）命の妬を憚りて
河内国茅渟（チヌ）の宮にはなれすへて時々
行幸し給ふ面影あり此允恭天皇の
太子木梨軽（キナシカルノ）皇子（ミコ）容姿佳麗（カホキラ〳〵シ）みるもの
をのつからめてぬ同母（ハラカラ）妹（イモト）大娘皇女（オホイラツヒメ）亦
艶妙太子常に逢見んことをおもふ
つみあることをそれて黙（モタ）せりと
云々 匂宮かたちめてたくおはしてはら
からの女一宮の御有さまをいみしと
めて、業平の妹にねよけにみゆる
とよめりし絵をみせまいらしてうち
とけてねみん物とは思はねとむすほゝれ
たる心ちこそすれとの給へるに似たり
此匂宮薫大将の思ひ人浮舟君を宇治
に隠し置給ひし所へ大将のおはしたる
まねして終に密通の事も日本紀十二
に履中天皇羽田矢代宿祢かむすめ

」94丁オ

」94丁ウ

」95丁オ

黒媛を妃とし給はんとて納采既に
をはりて住吉仲皇子履中天皇の御
名をかりて忍ひて黒媛ををかしつ
黒媛は只履中のおはしつると思ひて
逢初たるにかよふへし此浮舟君を
はしめ薫宇治にてのそきみ給ふに故
大君によく似たりしを哀に覚えて世の
中に大君おはしけりといひなくさめまほ
しとある事日本紀に天稚彦（アメワカヒコ）うせて
味稚（アチスキ〔マヽ〕）高彦根（タカヒコネ）の神喪を弔ひに天に
のぼり給へりしに此神の形天稚彦
に似たるを天稚彦の親属皆吾君
猶おはしけりといひて帯をよちひきて
且喜ひ且いためるにかよへり是らの類
猶多けれと悉には難註かやうの事と
もにてや日本紀をよくみたりとの綸言に
預けん
源氏物語止観説
一部始終みなつくり物語なれは空
光源氏は西宮左大臣一世の源氏なるに
准し桐壺の帝を延喜聖代に准し
其外其かける事をの〳〵古来の例
ある事を准してかけるは偏になきこ

」95丁ウ

」96丁オ

」96丁ウ

とにあらすとみるは假されは空にも
あらす假にもあらさるは中道実相
是一心三観空假中の三諦此物語の
ありさまなりとしるを此草子の止観
の説といへり亦湖月抄に源氏物語
一部のすかたを有門空門非有非空門
亦有亦空門の理にあつる説あり
といひしも尤一部の有さま正しく
ある事と見ゆるは有門の理也然とも
桐壺の帝更衣をはしめ光源氏君
其外も皆作り物語なれはこと〳〵
くなきことゝみれは空門の理なり
又作物かたり古例ある事とも也且又
人々今日の身の上に皆ある事也さ
れはあるにもあらすなきにもあら
すとみるは非有非空門の理也然は又
なく又ありとみんは亦有亦空の理也
猶此物語のうへのみならす世間森羅
万象みなかくのことし三世皆此理の外
なしされは此物かたり人のこのむ所の婬
風をもて書つらねて善道にみちひ
く媒として中庸の道にいれ中道
実相のさとりにいるへき方便の権教

」97丁オ

」97丁ウ

」98丁オ

のよし諸抄にいへる物なるへし

読覆醤集遊石山寺詩　七松子

半日幽閑入学廬　窓前数帙払衣魚

紫藤言葉国朝宝　那箇人称浮艶書

てにをは少々

やは　かはといふ詞也すへて歟といふ詞は
下にをく也やといふ詞は上に置也
たとへは春やむかしの春ならぬと
いへるは春は昔の春ならぬかといふ
心也花や雪といふは花は雪かと云儀
也其ことく下にかはといふへきを上
にてやはといひとてにをは也
桜花春くはゝれるとしに（ママ）たにも
ひとのこゝろにあかれやはせぬ
是も人の心にあかれぬかはあか
れよといふへきを上にてやはといへる也
しなのなる浅まのたけにたつ煙
をちこち人のみやはとかめぬ
遠近人の見とかめぬかは見とか
むへき事をとの心也又下にやは
とよむ事もありまさしやむく
ひなかりけりやは是もむくひの

」98丁ウ

」99丁オ

なかりけるかは報ひはあるはと也
又かはといふ詞をも上にをく事有
たれかは春をうらみはてたる
等のたくひあまたあり畢竟や
はとかはとはおなし心の詞にて
やはと下にをくにはへしやはあ
りやはけりやはなといふ也かはと
とむるにはへきかはあるかはけるかは
といふ也他流には色々やはといふ
詞を釈したれと此方には不用
之されと心は何も通すへし
源氏をくえんし　けんそくをくえん
そくといふたくひさすかをしかす
か　さるはしかるは等の事是五
音のひゝきにていふ詞也くえの
二字を文字を返すやうに返せは
けになる也　しかといふ詞も五音にて
返せはさになる也　しやうといふへ
きをさうといひ（しやうそく）（さうそく）しやうの
ことをさうのこと笙（所）（分）のふえをさう
の笛の類もおなし又しよふんを
そふんといひけんしよをけんそと
いふも同義也物にそ有けるを

」99丁ウ

」100丁オ

」100丁ウ

物にさりけるといふも　そあと
いふを五音のひゝきにてさといは
るゝ也けらしといふ詞もけりと
いふへきを　らしといふ詞五音にて
かへせはりとなれは也　かくろへは
隠れ也　ろへといふ詞れになれは也
いひけらくはいひける也おもへらく
は思へる也此たくひあけていひかた
し他はこれに准してしるへし
いかにせんいかんせんおなし詞也いかん
とはぬる詞うたにはいかにといへるなり
すへてはぬる詞はにとつかふ事連綿
也丹波路をたにはち牽牛子をけ
にこしの類也又いかゝせんともいへり
いかんかせんといふへきをはぬる詞を
略していかゝといへる也たとへは喜撰を
きせ越前をえちせ左衛門をさゑ
も左近をさことふたくひなり
はぬる詞を略しあるはにとつかふ詞
あけていひかたし又はぬる詞をみ
とつかふ事もありをんなをを
みな　ふんをふみせんをせみかんを
かみのたくひあけていふへからす又み

」101丁オ

」101丁ウ

」102丁オ

といふ詞をはぬる事もあり或はうと
つかふ(ママ)るもあり　かみのきみをかんの君
左衛門のかみをさゑものかうなとの
たくひなり　」102丁ウ
かよはきかくろきかまけてかほそきの類か
の字は発語也猶古き詞にいの字を発
語にせしもおほし　いゆきはゝかり
いそはへ　いたゝせる　いかくるゝ　いつもる
皆万葉集の詞にて行はゝかりそ
はへ戯た、せる立也隠るゝ積る等
の詞にいの字を添し也此類もおほし
見つゝををらん　見てをまいれ　わか子
にてをあれよ　ぬれてをゆかん　なみ
たとをしれ　恨みとをしれの類も
おほし又うれしも悲しも霧立
らしも等のもの字も助語也　」103丁オ
元禄乙亥林鐘初六染筆於近水亭而欲
伝児孫不可有外見者也　」103丁ウ

同十一日校合畢　七松子
雖私家伝不出窓外依御執学
不浅奉免御書写者也
元禄十五年小春吉祥日　季吟法印（朱方印・向南）

川越少将殿　」104丁オ
（遊紙1丁）　」104丁ウ

〔附記〕本稿を成すにあたり、貴重資料の閲覧・翻刻・複写等にご高配を賜りました各所蔵機関、『源氏物語微意』の閲覧・翻刻をお許しくださいました日本大学図書館に深謝申し上げます。

（みやがわ・しんや　本学大学院博士後期課程）

『微意』『湖月抄』『集成』『増註』『大成』対照表

【凡例】

一、『源氏物語微意』の各項に掲出される『源氏物語』本文の冒頭部について、板本『湖月抄』、『源氏物語湖月抄』（新典社、昭52・7～53・7、北村季吟古註釈集成7～17。以下、『集成』）、『増註　源氏物語湖月抄』（猪熊夏樹補註、有川武彦校訂、弘文社、昭和2・9～3・10。後に講談社学術文庫に収録、昭和57・5。以下、『増註』）、『源氏物語大成　校異篇』（池田亀鑑、中央公論社、昭28・6～29・2。以下、『大成』）のそれぞれにおける対応箇所の所在を一覧にした。

一、「項番」には『微意』の注記ごとの通し番号、「巻名」には『源氏物語』の巻名、「湖月抄」には板本『湖月抄』の丁数と表裏、「開始行」には板本『湖月抄』および『集成』の対応本文の開始行数、「集成」には『集成』の巻数と頁数、「増註」には『増註』の頁数と対応本文の開始行数、「大成」には『大成』の頁数と対応本文の開始行数を記した。対応本文を有さない場合は斜線で示した。

一、「備考」欄に記すべき内容が長文になる場合には※印で示し、頁末に記した。

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
1							※1
2	桐壺	3丁オ	4行目	2巻　9頁	4頁 3行目	5頁 9行目	
3	桐壺	5丁ウ	4行目	2巻 14頁	9頁 2行目	7頁11行目	
4	桐壺	6丁オ	1行目	2巻 15頁	9頁 5行目	7頁13行目	
5	桐壺	6丁オ	6行目	2巻 15頁	10頁 2行目	7頁 2行目	
6	桐壺	13丁ウ	12行目	2巻 30頁	22頁 8行目	14頁 8行目	
7	桐壺	18丁オ	4行目	2巻 39頁	29頁 9行目	17頁13行目	
8	桐壺	19丁ウ	4行目	2巻 42頁	31頁12行目	18頁13行目	
9	桐壺	26丁オ	3行目	2巻 55頁	41頁11行目	23頁13行目	
10	帚木	7丁ウ	1行目	2巻 86頁	67頁 7行目	39頁14行目	
11	帚木	7丁ウ	4行目	2巻 86頁	67頁 9行目	40頁 1行目	
12	帚木	8丁ウ	6行目	2巻 88頁	70頁 6行目	40頁14行目	
13	帚木	9丁オ	2行目	2巻 89頁	70頁11行目	41頁 5行目	
14	帚木	14丁ウ	10行目	2巻100頁	84頁 5行目	46頁11行目	
15	帚木	15丁オ	4行目	2巻101頁	85頁 3行目	46頁14行目	
16	帚木	15丁オ	9行目	2巻101頁	85頁 6行目	47頁 3行目	
17	帚木	16丁オ	1行目	2巻103頁	87頁 3行目	47頁 6行目	

※1　これより『微意』上巻、『増註』上巻、『大成』巻一。

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
18	帚木	16丁ウ	7行目	2巻104頁	88頁 4行目	48頁 2行目	
19	帚木	24丁ウ	12行目	2巻120頁	104頁 2行目	55頁11行目	
20	帚木	39丁オ	6行目	2巻149頁	127頁 9行目	68頁 8行目	
21	帚木	39丁オ	11行目	2巻149頁	127頁12行目	68頁11行目	
22	帚木	42丁ウ	4行目	2巻156頁	132頁 5行目	71頁10行目	
23	空蝉	3丁ウ	11行目	2巻182頁	148頁 5行目	86頁13行目	
24	空蝉	4丁オ	5行目	2巻183頁	148頁 9行目	87頁 2行目	
25	空蝉	11丁オ	3行目	2巻197頁	157頁12行目	93頁 7行目	
26	夕顔	8丁オ	11行目	2巻219頁	171頁11行目	106頁 9行目	
27	夕顔	10丁オ	12行目	2巻223頁	174頁12行目	108頁 8行目	
28	夕顔	11丁ウ	4行目	2巻226頁	176頁10行目	109頁10行目	
29	夕顔	12丁ウ	2行目	2巻228頁	178頁 7行目	110頁 9行目	
30	夕顔	27丁ウ	1行目	2巻258頁	199頁 6行目	123頁 8行目	
31	夕顔	28丁ウ	3行目	2巻260頁	200頁10行目	124頁 8行目	
32	夕顔	40丁ウ	1行目	2巻284頁	215頁 4行目	135頁 5行目	
33	夕顔	52丁ウ	4行目	2巻308頁	234頁 4行目	146頁 1行目	
34	若紫	4丁ウ	3行目	2巻322頁	240頁 9行目	153頁 2行目	
35	若紫	20丁オ	8行目	2巻353頁	264頁12行目	167頁 4行目	
36	若紫	21丁ウ	9行目	2巻356頁	267頁 6行目	168頁 9行目	
37	若紫	27丁ウ	1行目	2巻368頁	275頁 6行目	173頁 9行目	
38	若紫	49丁オ	11行目	2巻411頁	304頁 8行目	192頁 9行目	
39	末摘花	2丁オ	7行目	3巻 7頁	312頁 5行目	201頁 4行目	
40	末摘花	8丁ウ	2行目	3巻 20頁	321頁 5行目	206頁 6行目	
41	末摘花	11丁ウ	2行目	3巻 26頁	325頁 6行目	208頁12行目	
42	末摘花	29丁オ	6行目	3巻 61頁	349頁 5行目	224頁 6行目	
43	末摘花	29丁ウ	3行目	3巻 62頁	349頁10行目	224頁10行目	
44	紅葉賀	4丁オ	6行目	3巻 87頁	367頁 5行目	238頁11行目	
45	紅葉賀	11丁オ	12行目	3巻101頁	376頁 1行目	245頁 1行目	
46	紅葉賀	12丁オ	2行目	3巻103頁	377頁 1行目	245頁 8行目	
47	紅葉賀	14丁オ	12行目	3巻107頁	380頁 6行目	247頁11行目	
48	紅葉賀	16丁ウ	7行目	3巻112頁	383頁 8行目	249頁13行目	
49	紅葉賀	18丁ウ	8行目	3巻116頁	386頁 2行目	251頁10行目	

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
50	紅葉賀	21丁オ	2行目	3巻121頁	388頁12行目	253頁 8行目	※2
51	紅葉賀	21丁ウ	1行目	3巻122頁	389頁 6行目	253頁12行目	
52	紅葉賀	22丁オ	1行目	3巻123頁	390頁 1行目	254頁 4行目	
53	紅葉賀	28丁オ	1行目	3巻135頁	398頁11行目	259頁 3行目	
54	紅葉賀	31丁オ	10行目	3巻141頁	403頁10行目	262頁 1行目	
55	花宴	4丁ウ	1行目	3巻156頁	410頁 7行目	270頁12行目	
56	花宴	4丁ウ	10行目	3巻156頁	411頁 5行目	271頁 3行目	
57	花宴	4丁ウ	11行目	3巻156頁	411頁 6行目	271頁 4行目	
58	花宴	5丁オ	9行目	3巻157頁	411頁12行目	271頁 9行目	
59	花宴	13丁オ	4行目	3巻173頁	422頁10行目	277頁 9行目	
60	葵	3丁ウ	4行目	3巻186頁	429頁 4行目	284頁 1行目	
61	葵	4丁オ	10行目	3巻187頁	430頁 3行目	284頁11行目	
62	葵	6丁ウ	12行目	3巻192頁	433頁10行目	286頁13行目	
63	葵	7丁オ	6行目	3巻193頁	434頁 2行目	287頁 3行目	
64	葵	7丁オ	9行目	3巻193頁	434頁 4行目	287頁 4行目	
65	葵	10丁ウ	4行目	3巻200頁	438頁11行目	289頁11行目	
66	葵	15丁ウ	12行目	3巻210頁	446頁 6行目	294頁 9行目	67と転倒
67	葵	14丁ウ	1行目	3巻208頁	444頁 3行目	293頁 3行目	66と転倒
68	葵	17丁ウ	3行目	3巻214頁	448頁 9行目	296頁 3行目	
69	葵	25丁オ	8行目	3巻229頁	458頁 7行目	303頁 5行目	
70	葵	30丁ウ	9行目	3巻240頁	465頁 7行目	308頁 4行目	
71	葵	45丁ウ	12行目	3巻270頁	484頁 3行目	320頁10行目	
72	榊	2丁オ	5行目	3巻291頁	494頁 3行目	333頁 3行目	
73	榊	12丁オ	5行目	3巻311頁	507頁 6行目	341頁 8行目	
74	榊	12丁ウ	4行目	3巻312頁	508頁 1行目	341頁14行目	
75	榊	13丁ウ	6行目	3巻314頁	509頁 5行目	342頁14行目	
76	榊	14丁オ	2行目	3巻315頁	509頁10行目	343頁 4行目	
77	榊	16丁ウ	9行目	3巻320頁	513頁 5行目	345頁12行目	
78	榊	17丁オ	9行目	3巻321頁	513頁12行目	346頁 4行目	
79	榊	18丁オ	6行目	3巻323頁	514頁12行目	347頁 1行目	
80	榊	21丁オ	8行目	3巻329頁	519頁 2行目	349頁 5行目	
81	榊	22丁オ	1行目	3巻331頁	519頁12行目	349頁13行目	

※2 『大成』の主底本（大島本）は対応本文を有さない。

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
82	榊	27丁ウ	1行目	3巻342頁	526頁 3行目	354頁 8行目	
83	榊	32丁ウ	5行目	3巻352頁	532頁11行目	358頁14行目	
84	榊	35丁オ	12行目	3巻357頁	535頁12行目	361頁 5行目	
85	榊	36丁ウ	4行目	3巻360頁	537頁10行目	362頁 6行目	
86	榊	39丁オ	4行目	3巻365頁	541頁 4行目	364頁 9行目	
87	榊	48丁オ	10行目	3巻383頁	551頁12行目	372頁 5行目	
88	榊	51丁オ	2行目	3巻389頁	555頁 2行目	374頁 9行目	
89	榊	51丁ウ	4行目	3巻390頁	555頁 8行目	374頁14行目	
90	花散里	3丁ウ	11行目	3巻412頁	565頁 7行目	388頁12行目	
91	須磨	5丁ウ	1行目	4巻 14頁	574頁 3行目	397頁13行目	
92	須磨	16丁ウ	9行目	4巻 36頁	588頁 5行目	408頁 2行目	93と転倒
93	須磨	11丁ウ	11行目	4巻 26頁	582頁 2行目	403頁 8行目	92と転倒
94	須磨	42丁ウ	9行目	4巻 88頁	622頁 4行目	430頁 1行目	
95	明石	2丁オ	7行目	4巻111頁	634頁 4行目	441頁 4行目	
96	明石	9丁オ	10行目	4巻125頁	642頁11行目	447頁 2行目	
97	明石	12丁オ	9行目	4巻131頁	646頁 6行目	449頁 8行目	
98	明石	26丁ウ	3行目	4巻160頁	663頁 3行目	460頁13行目	
99	明石	27丁オ	1行目	4巻161頁	663頁 8行目	461頁 3行目	
100	明石	27丁オ	5行目	4巻161頁	663頁10行目	461頁 5行目	
101	明石	27丁オ	6行目	4巻161頁	663頁11行目	461頁 6行目	
102	明石	35丁ウ	11行目	4巻178頁	675頁 3行目	468頁 5行目	
103	明石	43丁ウ	5行目	4巻194頁	685頁 2行目	475頁 4行目	
104	明石	45丁ウ	3行目	4巻198頁	687頁 1行目	476頁11行目	
105	澪標	4丁オ	3行目	4巻213頁	4頁 3行目	484頁10行目	※3
106	澪標	4丁ウ	6行目	4巻214頁	5頁 5行目	485頁 4行目	
107	澪標	6丁オ	2行目	4巻217頁	6頁12行目	486頁 2行目	
108	澪標	6丁ウ	9行目	4巻218頁	7頁12行目	486頁12行目	
109	澪標	9丁オ	2行目	4巻223頁	10頁 7行目	488頁 9行目	
110	澪標	9丁ウ	10行目	4巻224頁	11頁 8行目	489頁 4行目	
111	澪標	11丁オ	11行目	4巻227頁	13頁10行目	490頁12行目	
112	澪標	14丁ウ	3行目	4巻234頁	18頁 1行目	493頁 8行目	
113	澪標	18丁オ	12行目	4巻241頁	22頁12行目	496頁14行目	

※3　これより『増註』中巻。

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
114	泠標	20丁ウ	4行目	4巻246頁	25頁 7行目	498頁11行目	
115	泠標	26丁ウ	6行目	4巻258頁	34頁 2行目	503頁 9行目	
116	蓬生	4丁ウ	3行目	4巻294頁	54頁 3行目	521頁 4行目	
117	蓬生	5丁オ	7行目	4巻295頁	55頁 1行目	521頁13行目	
118	蓬生	9丁オ	4行目	4巻303頁	59頁 9行目	525頁 6行目	
119	蓬生	11丁オ	7行目	4巻307頁	62頁 4行目	527頁 5行目	
120	蓬生	12丁ウ	2行目	4巻310頁	63頁10行目	528頁 7行目	
121	蓬生	14丁オ	4行目	4巻313頁	65頁 9行目	529頁12行目	
122	蓬生	25丁オ	11行目	4巻335頁	79頁 7行目	540頁 1行目	
123	蓬生	26丁オ	9行目	4巻337頁	80頁 8行目	540頁13行目	
124	関屋	4丁オ	3行目	4巻349頁	84頁 9行目	548頁12行目	
125	関屋	5丁オ	9行目	4巻351頁	86頁 4行目	549頁13行目	
126	関屋	6丁ウ	4行目	4巻354頁	87頁10行目	551頁 1行目	
127	関屋	7丁オ	4行目	4巻355頁	88頁 4行目	551頁 6行目	
128	絵合	6丁ウ	1行目	4巻372頁	95頁10行目	560頁11行目	
129	絵合	7丁オ	4行目	4巻373頁	96頁 7行目	561頁 5行目	
130	絵合	8丁ウ	3行目	4巻376頁	98頁 8行目	562頁 9行目	
131	絵合	9丁オ	3行目	4巻377頁	99頁 3行目	563頁 1行目	
132	絵合	23丁オ	2行目	4巻405頁	116頁10行目	574頁 3行目	
133	絵合	23丁オ	5行目	4巻405頁	116頁12行目	574頁 5行目	
134	松風	2丁ウ	8行目	4巻414頁	120頁12行目	579頁11行目	
135	松風	15丁ウ	3行目	4巻440頁	137頁 2行目	590頁 3行目	
136	松風	16丁ウ	4行目	4巻442頁	138頁 8行目	591頁 3行目	
137	薄雲	4丁オ	1行目	5巻 11頁	154頁 7行目	604頁 9行目	
138	薄雲	14丁ウ	4行目	5巻 32頁	167頁 7行目	613頁 3行目	
139	薄雲	15丁オ	10行目	5巻 33頁	168頁 5行目	613頁11行目	
140	薄雲	16丁オ	4行目	5巻 35頁	169頁 4行目	614頁 6行目	
141	薄雲	27丁オ	4行目	5巻 57頁	181頁 6行目	623頁 8行目	
142	薄雲	27丁ウ	4行目	5巻 58頁	182頁 1行目	623頁13行目	
143	薄雲	30丁オ	9行目	5巻 63頁	184頁12行目	626頁 1行目	
144	薄雲	33丁オ	10行目	5巻 69頁	188頁 4行目	628頁 9行目	
145	薄雲	33丁ウ	4行目	5巻 70頁	188頁 7行目	628頁12行目	
146	薄雲	33丁ウ	9行目	5巻 70頁	189頁 3行目	628頁14行目	

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
147	朝顔	2丁オ	4行目	5巻 85頁	196頁 2行目	639頁 2行目	
148	朝顔	14丁オ	5行目	5巻109頁	211頁11行目	649頁 5行目	
149	朝顔	22丁ウ	6行目	5巻126頁	222頁 3行目	656頁 3行目	
150	朝顔	24丁オ	3行目	5巻129頁	224頁 2行目	657頁 6行目	
151	乙女						※4
152	乙女	6丁オ	10行目	5巻147頁	233頁 6行目	668頁10行目	
153	乙女	7丁ウ	8行目	5巻150頁	235頁 5行目	669頁13行目	
154	乙女	11丁オ	8行目	5巻157頁	240頁 3行目	672頁11行目	
155	乙女	11丁ウ	6行目	5巻158頁	240頁 8行目	673頁 2行目	
156	乙女	13丁ウ	9行目	5巻162頁	243頁 1行目	674頁13行目	
157	乙女	14丁ウ	4行目	5巻164頁	244頁 5行目	675頁 9行目	
158	乙女	14丁ウ	6行目	5巻164頁	244頁 6行目	675頁10行目	
159	乙女	16丁オ	3行目	5巻167頁	245頁10行目	676頁10行目	
160	乙女	20丁ウ	9行目	5巻176頁	251頁 5行目	680頁11行目	
161	乙女	21丁ウ	3行目	5巻178頁	252頁 3行目	681頁 6行目	
162	乙女	22丁オ	11行目	5巻179頁	253頁 2行目	682頁 2行目	
163	乙女	22丁ウ	6行目	5巻180頁	253頁 6行目	682頁 6行目	
164	乙女	23丁オ	2行目	5巻181頁	253頁10行目	682頁10行目	
165	乙女	23丁オ	7行目	5巻181頁	254頁 1行目	682頁12行目	
166	乙女	23丁ウ	2行目	5巻182頁	254頁 5行目	683頁 2行目	
167	乙女	25丁ウ	12行目	5巻186頁	257頁 2行目	685頁 5行目	
168	乙女	26丁オ	6行目	5巻187頁	257頁 6行目	685頁 8行目	
169	乙女	26丁ウ	2行目	5巻188頁	257頁11行目	685頁12行目	
170	乙女	30丁オ	6行目	5巻195頁	262頁 2行目	689頁 3行目	
171	乙女	30丁ウ	8行目	5巻196頁	262頁10行目	689頁10行目	
172	乙女	35丁オ	6行目	5巻205頁	267頁11行目	693頁10行目	
173	乙女	38丁ウ	7行目	5巻212頁	272頁 4行目	696頁13行目	
174	乙女	47丁ウ	3行目	5巻230頁	282頁 2行目	704頁 7行目	
175	乙女	49丁オ	11行目	5巻233頁	284頁10行目	705頁14行目	
176	乙女	50丁オ	4行目	5巻235頁	285頁 7行目	706頁 8行目	
177	乙女	51丁オ	9行目	5巻237頁	286頁12行目	707頁 9行目	
178	乙女	54丁オ	1行目	5巻243頁	289頁11行目	709頁13行目	

※4　これより『微意』中巻。

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
179	乙女	54丁オ	4行目	5巻243頁	290頁 1行目	710頁 1行目	
180	乙女	55丁ウ	1行目	5巻246頁	291頁 7行目	711頁 4行目	
181	乙女	56丁オ	9行目	5巻247頁	292頁 9行目	712頁 1行目	
182	玉鬘						※5
183	玉鬘	6丁ウ	8行目	5巻264頁	303頁10行目	722頁 4行目	
184	玉鬘	16丁ウ	12行目	5巻284頁	316頁 2行目	730頁12行目	
185	玉鬘	30丁オ	6行目	5巻311頁	331頁 8行目	742頁 4行目	
186	玉鬘	30丁ウ	10行目	5巻312頁	332頁 4行目	742頁12行目	
187	玉鬘	31丁オ	7行目	5巻313頁	332頁 9行目	743頁 2行目	
188	玉鬘	32丁オ	2行目	5巻315頁	333頁 8行目	743頁12行目	
189	玉鬘	35丁ウ	8行目	5巻322頁	338頁 2行目	746頁14行目	
190	玉鬘	36丁オ	9行目	5巻323頁	339頁 1行目	747頁 7行目	
191	玉鬘	37丁オ	8行目	5巻325頁	339頁12行目	748頁 3行目	
192	玉鬘	38丁ウ	12行目	5巻328頁	341頁10行目	749頁 8行目	
193	玉鬘	42丁オ	6行目	5巻335頁	345頁 6行目	752頁 3行目	
194	玉鬘	42丁ウ	3行目	5巻336頁	345頁11行目	752頁 7行目	
195	玉鬘	45丁ウ	7行目	5巻342頁	349頁 4行目	754頁13行目	
196	玉鬘	46丁ウ	2行目	5巻344頁	350頁 6行目	755頁 8行目	
197	初音						
198	初音	7丁ウ	6行目	5巻366頁	363頁 3行目	767頁 9行目	
199	初音	8丁ウ	4行目	5巻368頁	364頁 6行目	768頁 7行目	
200	初音	18丁ウ	7行目	5巻388頁	376頁 8行目	776頁 4行目	
201	初音	18丁ウ	8行目	5巻388頁	376頁 9行目	776頁 5行目	
202	胡蝶						
203	胡蝶	10丁ウ	5行目	5巻414頁	391頁 3行目	787頁14行目	
204	胡蝶	13丁ウ	5行目	5巻420頁	394頁 7行目	790頁 8行目	
205	胡蝶	19丁オ	9行目	5巻431頁	401頁 5行目	795頁 4行目	
206	胡蝶	20丁ウ	6行目	5巻434頁	402頁12行目	796頁 7行目	
207	胡蝶	21丁ウ	10行目	5巻436頁	404頁 5行目	797頁 8行目	
208	胡蝶	24丁ウ	9行目	5巻442頁	407頁10行目	800頁 4行目	
209	蛍	6丁ウ	5行目	6巻 16頁	415頁 6行目	808頁13行目	
210	蛍	8丁ウ	6行目	6巻 20頁	418頁 1行目	810頁 7行目	

※5　これより『大成』巻二。

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
211	蛍	9丁オ	10行目	6巻 21頁	418頁10行目	811頁 2行目	212と転倒
212	蛍	9丁オ	6行目	6巻 21頁	418頁 8行目	810頁14行目	211と転倒
213	蛍	13丁ウ	7行目	6巻 30頁	424頁 2行目	814頁 7行目	
214	蛍	15丁ウ	12行目	6巻 34頁	426頁11行目	816頁 3行目	
215	蛍	19丁オ	2行目	6巻 41頁	431頁 5行目	818頁 3行目	
216	蛍	20丁ウ	5行目	6巻 44頁	433頁 7行目	819頁 6行目	
217	蛍	20丁ウ	6行目	6巻 44頁	433頁 8行目	819頁 6行目	
218	蛍	20丁ウ	11行目	6巻 44頁	434頁 1行目	819頁 9行目	
219	蛍	24丁ウ	9行目	6巻 52頁	438頁 7行目	822頁 9行目	
220	常夏	4丁ウ	1行目	6巻 68頁	445頁 2行目	830頁14行目	
221	常夏	7丁ウ	7行目	6巻 74頁	448頁 8行目	833頁 9行目	
222	常夏	13丁ウ	11行目	6巻 86頁	456頁 6行目	838頁 6行目	
223	常夏	16丁オ	2行目	6巻 91頁	458頁10行目	840頁 2行目	
224	常夏	24丁オ	4行目	6巻107頁	468頁10行目	846頁13行目	
225	篝火	2丁オ	3行目	6巻121頁	476頁 2行目	855頁 2行目	
226	篝火	3丁オ	6行目	6巻123頁	477頁 4行目	856頁 1行目	
227	野分	4丁オ	4行目	6巻135頁	484頁 5行目	864頁 9行目	
228	野分	6丁オ	2行目	6巻139頁	486頁 6行目	866頁 3行目	
229	野分	6丁オ	5行目	6巻139頁	486頁 8行目	866頁 4行目	
230	野分	6丁オ	12行目	6巻139頁	487頁 4行目	866頁 8行目	
231	野分	7丁オ	11行目	6巻141頁	488頁 3行目	867頁 5行目	
232	野分	9丁ウ	10行目	6巻146頁	490頁12行目	869頁 6行目	
233	野分	11丁ウ	7行目	6巻150頁	493頁 6行目	871頁 1行目	
234	野分	14丁ウ	6行目	6巻156頁	496頁 7行目	873頁 5行目	
235	野分	16丁オ	5行目	6巻159頁	498頁 5行目	874頁 8行目	
236	野分	17丁ウ	10行目	6巻162頁	500頁 6行目	875頁12行目	
237	行幸						
238	行幸	2丁オ	9行目	6巻179頁	508頁 6行目	885頁 5行目	
239	行幸	4丁ウ	10行目	6巻184頁	511頁 9行目	887頁 4行目	
240	行幸	6丁オ	10行目	6巻187頁	513頁11行目	888頁 7行目	
241	行幸	8丁ウ	9行目	6巻192頁	517頁 1行目	890頁 6行目	
242	行幸	10丁オ	10行目	6巻195頁	518頁10行目	891頁12行目	
243	行幸	11丁ウ	4行目	6巻198頁	520頁 5行目	893頁 1行目	

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
244	行幸	12丁オ	7行目	6巻199頁	521頁 4行目	893頁10行目	
245	行幸	21丁オ	5行目	6巻217頁	532頁 2行目	901頁13行目	
246	行幸	24丁オ	7行目	6巻223頁	536頁 1行目	904頁13行目	
247	行幸	27丁ウ	9行目	6巻230頁	540頁 7行目	908頁 4行目	
248	藤袴	6丁オ	4行目	6巻253頁	551頁 4行目	920頁 9行目	
249	藤袴	7丁ウ	1行目	6巻256頁	553頁 5行目	921頁 8行目	
250	藤袴	8丁オ	2行目	6巻257頁	554頁 1行目	922頁 1行目	
251	藤袴	9丁ウ	5行目	6巻260頁	555頁12行目	923頁 7行目	
252	藤袴	11丁オ	1行目	6巻263頁	557頁 6行目	924頁 6行目	
253	藤袴	15丁ウ	12行目	6巻272頁	563頁10行目	928頁11行目	
254	藤袴	17丁ウ	1行目	6巻276頁	565頁12行目	930頁 5行目	
255	真木柱						
256	真木柱	2丁オ	3行目	6巻283頁	568頁 2行目	935頁 2行目	
257	真木柱	9丁オ	5行目	6巻297頁	576頁 8行目	941頁 1行目	
258	真木柱	23丁ウ	7行目	6巻326頁	594頁 2行目	953頁11行目	
259	真木柱	26丁ウ	3行目	6巻332頁	597頁 7行目	956頁 6行目	
260	真木柱	31丁ウ	4行目	6巻342頁	603頁11行目	960頁13行目	
261	真木柱	33丁オ	2行目	6巻345頁	605頁 7行目	962頁 3行目	
262	真木柱	40丁ウ	1行目	6巻360頁	614頁12行目	968頁11行目	
263	真木柱	40丁ウ	11行目	6巻360頁	615頁 5行目	969頁 2行目	
264	梅枝	2丁ウ	5行目	6巻370頁	618頁10行目	975頁10行目	
265	梅枝	19丁オ	3行目	6巻403頁	639頁11行目	989頁 8行目	
266	梅枝	19丁ウ	10行目	6巻404頁	640頁10行目	990頁 4行目	
267	梅枝	20丁オ	7行目	6巻405頁	641頁 3行目	990頁 9行目	
268	梅枝	21丁ウ	7行目	6巻408頁	642頁11行目	991頁13行目	
269	梅枝	22丁オ	1行目	6巻409頁	643頁 3行目	992頁 2行目	
270	藤裏葉	3丁ウ	10行目	6巻420頁	648頁 3行目	998頁11行目	
271	藤裏葉	5丁オ	8行目	6巻423頁	650頁 2行目	1000頁 2行目	
272	藤裏葉	6丁オ	11行目	6巻425頁	651頁 5行目	1001頁 2行目	
273	藤裏葉	12丁ウ	8行目	6巻438頁	659頁 7行目	1006頁 2行目	
274	藤裏葉	14丁オ	4行目	6巻441頁	661頁 4行目	1007頁 5行目	
275	藤裏葉	14丁ウ	1行目	6巻442頁	661頁 8行目	1007頁 8行目	
276	藤裏葉	16丁ウ	9行目	6巻446頁	664頁 7行目	1009頁10行目	

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
277	藤裏葉	21丁ウ	8行目	6巻456頁	670頁10行目	1013頁13行目	
278	藤裏葉	24丁ウ	12行目	6巻462頁	675頁 2行目	1016頁12行目	
279	若菜上	31丁ウ	4行目	7巻 66頁	717頁 3行目	1051頁 1行目	
280	若菜上	32丁ウ	11行目	7巻 68頁	718頁 8行目	1052頁 3行目	
281	若菜上	32丁ウ	12行目	7巻 68頁	718頁 8行目	1052頁 3行目	
282	若菜上	33丁ウ	1行目	7巻 70頁	719頁 4行目	1052頁 9行目	
283	若菜上	40丁オ	8行目	7巻 83頁	727頁 9行目	1058頁 9行目	
284	若菜上	47丁ウ	1行目	7巻 98頁	736頁10行目	1065頁 3行目	
285	若菜上	48丁ウ	12行目	7巻100頁	738頁 7行目	1066頁 7行目	
286	若菜上	51丁オ	8行目	7巻105頁	741頁10行目	1068頁10行目	
287	若菜上	56丁オ	2行目	7巻115頁	747頁 6行目	1072頁14行目	
288	若菜上	57丁オ	1行目	7巻117頁	749頁 1行目	1073頁14行目	
289	若菜上	62丁ウ	11行目	7巻128頁	756頁 6行目	1079頁 7行目	
290	若菜上	63丁オ	3行目	7巻129頁	756頁 8行目	1079頁 9行目	
291	若菜上	79丁ウ	4行目	7巻162頁	776頁11行目	1094頁10行目	
292	若菜上	85丁オ	11行目	7巻173頁	784頁 1行目	1099頁 9行目	
293	若菜上	92丁オ	2行目	7巻187頁	792頁 5行目	1105頁 9行目	
294	若菜上	92丁オ	6行目	7巻187頁	792頁 7行目	1105頁11行目	
295	若菜上	95丁オ	1行目	7巻193頁	795頁 8行目	1108頁 1行目	
296	若菜上	96丁オ	3行目	7巻195頁	796頁12行目	1109頁 1行目	
297	若菜上	96丁オ	4行目	7巻195頁	797頁 1行目	1109頁 1行目	
298	若菜上	98丁オ	1行目	7巻199頁	799頁 5行目	1110頁11行目	
299	若菜上	98丁オ	11行目	7巻199頁	799頁12行目	1111頁 3行目	
300	若菜上	101丁ウ	6行目	7巻206頁	804頁 1行目	1114頁 3行目	
301	若菜上	101丁ウ	11行目	7巻206頁	804頁 4行目	1114頁 6行目	
302	若菜上	107丁ウ	9行目	7巻218頁	811頁 9行目	1119頁11行目	
303	若菜下	2丁オ	5行目	7巻227頁	817頁 4行目	1125頁 3行目	
304	若菜下	3丁オ	12行目	7巻229頁	819頁 1行目	1126頁 4行目	
305	若菜下	5丁ウ	9行目	7巻234頁	821頁 9行目	1128頁 5行目	
306	若菜下	6丁オ	2行目	7巻235頁	821頁12行目	1128頁 7行目	
307	若菜下	15丁オ	1行目	7巻253頁	832頁 6行目	1136頁 8行目	
308	若菜下	16丁オ	4行目	7巻255頁	833頁 9行目	1137頁 8行目	
309	若菜下	23丁ウ	1行目	7巻270頁	843頁 3行目	1144頁 1行目	

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
310	若菜下	45丁ウ	6行目	7巻314頁	868頁11行目	1163頁 5行目	
311	若菜下	49丁ウ	1行目	7巻322頁	873頁 4行目	1166頁11行目	
312	若菜下	59丁ウ	1行目	7巻342頁	884頁11行目	1175頁10行目	
313	若菜下	61丁オ	3行目	7巻345頁	886頁 9行目	1177頁 1行目	
314	若菜下	62丁ウ	10行目	7巻348頁	888頁 9行目	1178頁 9行目	
315	若菜下	65丁ウ	2行目	7巻354頁	892頁 4行目	1181頁 2行目	
316	若菜下	67丁ウ	10行目	7巻358頁	894頁11行目	1183頁 2行目	
317	若菜下	71丁オ	5行目	7巻365頁	898頁10行目	1186頁 2行目	
318	若菜下	72丁オ	2行目	7巻367頁	899頁11行目	1186頁13行目	
319	若菜下	75丁オ	7行目	7巻373頁	903頁10行目	1189頁13行目	
320	若菜下	76丁ウ	1行目	7巻376頁	905頁 4行目	1191頁 1行目	
321	若菜下	79丁ウ	3行目	7巻382頁	909頁 1行目	1193頁11行目	
322	若菜下	83丁オ	2行目	7巻389頁	913頁 3行目	1196頁12行目	
323	若菜下	86丁オ	3行目	7巻395頁	916頁 9行目	1199頁 7行目	
324	若菜下	87丁ウ	10行目	7巻398頁	919頁 3行目	1201頁 2行目	
325	若菜下	91丁オ	7行目	7巻405頁	923頁 1行目	1204頁 1行目	
326	若菜下	107丁オ	8行目	7巻437頁	942頁 2行目	1218頁 7行目	
327	柏木	2丁ウ	2行目	8巻 8頁	948頁 8行目	1227頁 7行目	
328	柏木	2丁ウ	9行目	8巻 8頁	948頁12行目	1227頁11行目	
329	柏木	9丁オ	6行目	8巻 21頁	956頁 3行目	1233頁 4行目	
330	柏木	10丁オ	8行目	8巻 23頁	957頁 4行目	1234頁 2行目	
331	柏木	23丁オ	8行目	8巻 49頁	971頁10行目	1245頁 7行目	
332	柏木	24丁オ	2行目	8巻 51頁	972頁 9行目	1246頁 3行目	
333	柏木	35丁オ	9行目	8巻 73頁	985頁 4行目	1256頁 2行目	
334	柏木	41丁オ	11行目	8巻 85頁	992頁10行目	1261頁 7行目	
335	横笛	3丁オ	1行目	8巻103頁	3頁 2行目	1269頁13行目	※6
336	横笛	7丁オ	9行目	8巻111頁	7頁12行目	1273頁 7行目	
337	横笛	10丁オ	4行目	8巻117頁	11頁 1行目	1275頁13行目	
338	横笛	10丁ウ	4行目	8巻118頁	11頁10行目	1276頁 6行目	
339	横笛	15丁ウ	3行目	8巻128頁	17頁11行目	1280頁12行目	
340	横笛	16丁ウ	12行目	8巻130頁	19頁 5行目	1281頁14行目	
341	横笛	19丁オ	5行目	8巻135頁	21頁12行目	1283頁14行目	

※6　これより『微意』下巻、『増註』下巻。

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
342	横笛	19丁オ	10行目	8巻135頁	22頁 3行目	1284頁 2行目	
343	横笛	19丁ウ	2行目	8巻136頁	22頁 5行目	1284頁 4行目	
344	横笛	21丁ウ	9行目	8巻140頁	24頁11行目	1286頁 3行目	
345	鈴虫	3丁ウ	11行目	8巻146頁	30頁 3行目	1292頁11行目	
346	鈴虫	7丁ウ	4行目	8巻154頁	34頁 8行目	1296頁 1行目	
347	夕霧	2丁オ	1行目	8巻181頁	48頁 1行目	1309頁 1行目	
348	夕霧	9丁ウ	9行目	8巻196頁	56頁12行目	1315頁12行目	
349	夕霧	14丁ウ	1行目	8巻206頁	62頁 4行目	1319頁13行目	
350	夕霧	19丁オ	1行目	8巻215頁	67頁 8行目	1323頁11行目	
351	夕霧	19丁オ	5行目	8巻215頁	67頁11行目	1323頁13行目	
352	夕霧	21丁ウ	1行目	8巻220頁	70頁 6行目	1325頁13行目	
353	夕霧	35丁ウ	12行目	8巻248頁	87頁 1行目	1338頁 8行目	
354	夕霧	36丁ウ	1行目	8巻250頁	87頁 8行目	1339頁 1行目	
355	夕霧	63丁ウ	11行目	8巻304頁	119頁 3行目	1362頁10行目	
356	夕霧	73丁オ	11行目	8巻323頁	129頁12行目	1370頁13行目	
357	夕霧	76丁オ	7行目	8巻329頁	133頁 2行目	1373頁 7行目	
358	夕霧	77丁ウ	6行目	8巻332頁	135頁 2行目	1374頁12行目	
359	御法	2丁オ	1行目	8巻341頁	138頁 1行目	1381頁 1行目	※7
360	御法	3丁ウ	10行目	8巻344頁	140頁 1行目	1382頁 9行目	
361	御法	5丁ウ	4行目	8巻348頁	142頁 2行目	1384頁 2行目	
362	御法	7丁ウ	3行目	8巻352頁	144頁 9行目	1385頁 9行目	
363	御法	11丁オ	12行目	8巻359頁	148頁11行目	1388頁14行目	
364	御法	12丁ウ	3行目	8巻362頁	150頁 7行目	1389頁14行目	
365	御法	15丁ウ	10行目	8巻368頁	154頁 3行目	1392頁13行目	
366	御法	16丁オ	5行目	8巻369頁	154頁 6行目	1393頁 2行目	
367	御法	20丁ウ	6行目	8巻378頁	159頁12行目	1396頁14行目	
368	御法	20丁ウ	8行目	8巻378頁	159頁12行目	1397頁 1行目	
369	幻						
370	幻	18丁ウ	8行目	8巻418頁	184頁 4行目	1418頁 1行目	
371	幻	23丁オ	8行目	8巻427頁	190頁 6行目	1422頁 4行目	
372	幻	24丁オ	7行目	8巻429頁	191頁 8行目	1423頁 1行目	
373	幻	24丁ウ	4行目	8巻430頁	192頁 2行目	1423頁 6行目	

※7　これより『大成』巻三。

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
374	雲隠						
375	匂宮						
376	匂宮	2丁オ	1行目	8巻437頁	208頁 1行目	1429頁 1行目	
377	匂宮	2丁ウ	8行目	8巻438頁	208頁12行目	1429頁11行目	
378	匂宮	3丁ウ	2行目	8巻440頁	209頁 9行目	1430頁 5行目	
379	匂宮	4丁ウ	8行目	8巻442頁	211頁 2行目	1431頁 6行目	
380	匂宮	7丁オ	7行目	8巻447頁	213頁11行目	1433頁 6行目	
381	匂宮	11丁ウ	3行目	8巻456頁	219頁 2行目	1436頁11行目	
382	匂宮	12丁ウ	5行目	8巻458頁	220頁 4行目	1437頁 9行目	
383	紅梅						
384	紅梅	2丁ウ	8行目	9巻 8頁	229頁12行目	1447頁11行目	
385	紅梅	15丁ウ	6行目	9巻 34頁	244頁11行目	1458頁 9行目	
386	竹河	3丁オ	4行目	9巻 43頁	250頁 2行目	1463頁13行目	
387	竹河	4丁オ	12行目	9巻 45頁	252頁 6行目	1465頁 2行目	
388	竹河	5丁オ	5行目	9巻 47頁	253頁 4行目	1465頁10行目	
389	竹河	8丁ウ	3行目	9巻 54頁	257頁 3行目	1468頁11行目	
390	竹河	17丁ウ	7行目	9巻 72頁	268頁 5行目	1476頁14行目	
391	竹河	20丁ウ	10行目	9巻 78頁	272頁 8行目	1479頁12行目	
392	竹河	21丁オ	11行目	9巻 79頁	273頁 4行目	1480頁 4行目	
393	竹河	25丁オ	2行目	9巻 87頁	277頁12行目	1483頁 9行目	
394	竹河	29丁ウ	8行目	9巻 96頁	284頁 3行目	1487頁12行目	
395	竹河	30丁オ	6行目	9巻 97頁	284頁 8行目	1488頁 3行目	
396	竹河	30丁オ	8行目	9巻 97頁	284頁 9行目	1488頁 4行目	
397	竹河	36丁ウ	10行目	9巻110頁	293頁 2行目	1494頁 2行目	
398	竹河	39丁ウ	4行目	9巻116頁	296頁 1行目	1496頁 5行目	
399	竹河	39丁ウ	7行目	9巻116頁	296頁 2行目	1496頁 6行目	
400	竹河	41丁ウ	3行目	9巻120頁	298頁 1行目	1497頁13行目	
401	竹河	42丁ウ	5行目	9巻122頁	299頁 4行目	1498頁11行目	
402	竹河	43丁ウ	5行目	9巻124頁	300頁 6行目	1499頁 9行目	
403	橋姫	8丁ウ	8行目	9巻148頁	314頁11行目	1512頁12行目	
404	橋姫	9丁オ	8行目	9巻149頁	315頁 6行目	1513頁 5行目	
405	橋姫	11丁ウ	2行目	9巻154頁	318頁 1行目	1515頁 5行目	
406	橋姫	19丁オ	2行目	9巻169頁	327頁 1行目	1521頁11行目	

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
407	橋姫	21丁オ	3行目	9巻173頁	329頁 5行目	1523頁 9行目	
408	橋姫	24丁オ	5行目	9巻179頁	333頁 3行目	1526頁 1行目	
409	橋姫	32丁オ	11行目	9巻195頁	342頁 8行目	1532頁11行目	
410	橋姫	32丁ウ	5行目	9巻196頁	342頁11行目	1532頁14行目	
411	橋姫	33丁オ	2行目	9巻197頁	343頁 4行目	1533頁 4行目	
412	橋姫	37丁オ	7行目	9巻205頁	347頁12行目	1536頁14行目	
413	橋姫	41丁オ	1行目	9巻213頁	351頁12行目	1540頁 3行目	
414	椎本	8丁オ	9行目	9巻237頁	365頁 5行目	1552頁 2行目	
415	椎本	9丁オ	3行目	9巻239頁	366頁 3行目	1552頁 9行目	
416	椎本	10丁ウ	7行目	9巻242頁	368頁 4行目	1554頁 1行目	
417	椎本	14丁オ	12行目	9巻249頁	372頁 8行目	1556頁14行目	
418	椎本	15丁オ	11行目	9巻251頁	373頁10行目	1557頁12行目	
419	椎本	25丁ウ	1行目	9巻272頁	385頁 3行目	1566頁 4行目	
420	総角	4丁ウ	7行目	9巻322頁	413頁 5行目	1589頁 2行目	
421	総角	10丁オ	3行目	9巻333頁	419頁 8行目	1593頁11行目	
422	総角	12丁オ	11行目	9巻337頁	422頁 4行目	1595頁12行目	
423	総角	23丁オ	4行目	9巻359頁	434頁 8行目	1604頁13行目	
424	総角	34丁ウ	2行目	9巻382頁	448頁 5行目	1614頁 7行目	
425	総角	37丁オ	6行目	9巻387頁	451頁 8行目	1616頁12行目	
426	総角	49丁ウ	6行目	9巻412頁	466頁10行目	1628頁 2行目	
427	総角	56丁オ	7行目	9巻425頁	474頁 8行目	1633頁13行目	
428	総角	65丁オ	3行目	9巻443頁	485頁12行目	1641頁14行目	
429	総角	67丁オ	6行目	9巻447頁	488頁 6行目	1643頁14行目	
430	総角	68丁ウ	2行目	9巻450頁	490頁 1行目	1645頁 3行目	
431	総角	68丁ウ	7行目	9巻450頁	490頁 5行目	1645頁 5行目	
432	総角	71丁ウ	1行目	9巻456頁	493頁 8行目	1647頁13行目	
433	総角	85丁ウ	3行目	9巻484頁	510頁 6行目	1660頁14行目	
434	総角	86丁オ	4行目	9巻485頁	511頁 2行目	1661頁 7行目	
435	総角	86丁ウ	3行目	9巻486頁	511頁 8行目	1661頁13行目	
436	早蕨	16丁オ	8行目	10巻 35頁	545頁 1行目	1690頁 3行目	
437	宿木	2丁オ	1行目	10巻 53頁	553頁 1行目	1701頁 1行目	
438	宿木	6丁オ	12行目	10巻 61頁	558頁 3行目	1705頁 1行目	
439	宿木	8丁ウ	10行目	10巻 66頁	561頁 6行目	1707頁 3行目	

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
440	宿木	10丁ウ	6行目	10巻 70頁	563頁 6行目	1708頁10行目	
441	宿木	23丁オ	9行目	10巻 95頁	578頁 8行目	1719頁11行目	
442	宿木	40丁オ	7行目	10巻129頁	599頁12行目	1735頁 6行目	
443	宿木	42丁オ	10行目	10巻133頁	602頁 7行目	1737頁 6行目	
444	宿木	43丁ウ	7行目	10巻136頁	604頁 5行目	1738頁10行目	
445	宿木	47丁ウ	4行目	10巻144頁	609頁 5行目	1742頁 6行目	
446	宿木	61丁ウ	7行目	10巻172頁	626頁 6行目	1754頁13行目	
447	宿木	95丁ウ	7行目	10巻240頁	668頁 5行目	1784頁11行目	
448	東屋	2丁オ	3行目	10巻255頁	676頁 2行目	1793頁 2行目	
449	東屋	12丁オ	2行目	10巻275頁	687頁12行目	1802頁 2行目	
450	東屋	36丁ウ	4行目	10巻324頁	717頁 8行目	1824頁 3行目	
451	東屋	38丁オ	7行目	10巻327頁	719頁 7行目	1825頁10行目	
452	東屋	41丁オ	4行目	10巻333頁	723頁 1行目	1828頁 4行目	453と転倒
453	東屋	39丁ウ	7行目	10巻330頁	721頁 5行目	1827頁 1行目	452と転倒
454	東屋	54丁オ	5行目	10巻359頁	738頁10行目	1839頁12行目	
455	東屋	63丁ウ	12行目	10巻378頁	750頁12行目	1848頁11行目	
456	浮舟	4丁オ	6行目	11巻 11頁	760頁 4行目	1860頁13行目	
457	浮舟	12丁オ	12行目	11巻 27頁	770頁 9行目	1868頁 8行目	
458	浮舟	17丁オ	5行目	11巻 37頁	776頁 5行目	1872頁12行目	
459	浮舟	18丁オ	3行目	11巻 39頁	777頁 5行目	1873頁 9行目	
460	浮舟	19丁オ	4行目	11巻 41頁	778頁 9行目	1874頁 9行目	
461	浮舟	19丁オ	6行目	11巻 41頁	778頁10行目	1874頁11行目	
462	浮舟	19丁ウ	11行目	11巻 42頁	779頁 9行目	1875頁 6行目	
463	浮舟	22丁オ	5行目	11巻 47頁	782頁 5行目	1877頁 8行目	
464	浮舟	23丁オ	9行目	11巻 49頁	783頁 9行目	1878頁 9行目	
465	浮舟	23丁ウ	2行目	11巻 50頁	783頁12行目	1878頁11行目	
466	浮舟	25丁オ	6行目	11巻 53頁	786頁 3行目	1880頁 6行目	
467	浮舟	34丁オ	7行目	11巻 71頁	798頁 1行目	1889頁 1行目	
468	浮舟	35丁ウ	10行目	11巻 74頁	799頁12行目	1890頁 9行目	
469	浮舟	36丁オ	6行目	11巻 75頁	800頁 5行目	1890頁14行目	
470	浮舟	42丁オ	9行目	11巻 87頁	808頁 5行目	1896頁13行目	
471	浮舟	43丁オ	1行目	11巻 89頁	809頁 4行目	1897頁 8行目	
472	浮舟	52丁オ	5行目	11巻107頁	821頁 6行目	1906頁 2行目	

項番	巻名	湖月抄	開始行	集成	増註	大成	備考
473	浮舟	53丁オ	6行目	11巻109頁	822頁 9行目	1907頁 2行目	
474	浮舟	56丁ウ	7行目	11巻116頁	827頁 1行目	1910頁 6行目	
475	浮舟	68丁オ	7行目	11巻139頁	841頁 2行目	1921頁 1行目	
476	蜻蛉	36丁オ	8行目	11巻225頁	892頁 4行目	1963頁 1行目	
477	蜻蛉	38丁オ	12行目	11巻229頁	895頁 8行目	1964頁12行目	
478	蜻蛉	39丁オ	11行目	11巻231頁	896頁10行目	1965頁11行目	
479	蜻蛉	46丁ウ	11行目	11巻246頁	905頁 8行目	1972頁 9行目	
480	蜻蛉	58丁ウ	3行目	11巻270頁	920頁 9行目	1982頁13行目	
481	蜻蛉	59丁オ	3行目	11巻271頁	921頁 4行目	1983頁 5行目	
482	手習	15丁オ	3行目	11巻307頁	941頁 5行目	2000頁 9行目	
483	手習	29丁オ	2行目	11巻335頁	957頁11行目	2012頁12行目	
484	手習	31丁オ	6行目	11巻339頁	960頁10行目	2014頁11行目	
485	手習	32丁オ	1行目	11巻341頁	961頁 8行目	2015頁 6行目	
486	手習	49丁オ	12行目	11巻375頁	983頁 2行目	2030頁12行目	
487	手習	65丁ウ	11行目	11巻408頁	1004頁 2行目	2045頁 6行目	
488	手習	68丁オ	8行目	11巻413頁	1007頁 1行目	2047頁 7行目	
489	手習	70丁ウ	2行目	11巻418頁	1009頁 8行目	2049頁 7行目	
490	手習	70丁ウ	7行目	11巻418頁	1010頁 4行目	2049頁10行目	
491	手習	70丁ウ	10行目	11巻418頁	1010頁 5行目	2049頁11行目	
492	夢浮橋	1丁オ		11巻425頁	1013頁		
493	夢浮橋	20丁ウ	9行目	11巻464頁	1037頁 6行目	2070頁12行目	